

所管事項調査

長崎原爆資料館 展示更新実施設計(案)の中間報告について

目次	ページ
1 長崎原爆資料館 展示更新実施設計(案)	2～39
2 実施設計(案)に対する運営審議会での主な意見	40
3 長崎原爆資料館 常設展 展示項目(案)	41～42
4 長崎原爆資料館 常設展 解説パネル原稿(案)	43～67
5 解説パネル原稿(案)に対する小委員会及び運営審議会での主な意見 . . .	68～72

原爆被爆対策部

令和 7 年 11 月

1 長崎原爆資料館 展示更新実施設計（案）

令和7年11月19日

長崎市

■ 目次

基本的な考え方	04
展示シナリオ	05～10
展示ゾーニング図	11～12
コーナー概要	
A. 1945年8月9日	13
1. 1945年8月9日	14
B. 原爆による被害の実相	15
2. 原爆による被害の実相	16～18
休憩スペース	19
C. 核兵器のない世界を目指して	20
3. 二つの世界大戦	21～26
4. 核兵器の脅威	27～31
5. 長崎の歩み	32～36
平和は長崎から	37
D. ビデオルーム	38
情報メディアコーナー	39

■ 基本的な考え方

展示更新にかかる基本方針

1 長崎原爆資料館の基本理念・設置目的（再掲）

（1）基本理念

長崎国際文化会館の建て替えにあたり作成した基本構想及び基本計画において、原爆資料館の基本理念を次のように定めている。（平成4年（1992年）2月）

長崎市は、原爆被爆都市の使命として核兵器の脅威と非人道性、戦争の悲惨さ、平和の大切さを世界に訴える責務がある。
したがって、原爆被爆に関する資料の体系的な整備、展示、保存を図るとともに戦争の恐ろしさや原爆被爆の体験を次代を担う子供たちに語り伝え、世界恒久平和の実現に努力する国際平和都市長崎のシンボリックな施設とする。

（2）設置目的

長崎原爆資料館の開館に向け、長崎原爆資料館条例を制定し、資料館の設置目的を次のように定めている。（平成7年（1995年）12月）

（設置）

第1条 本市は、原子爆弾により被爆した都市の使命として、被爆の実相と長崎市民の平和への願いを広く国の内外に伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与するため、原爆資料館を設ける。

（事業）

第3条 長崎原爆資料館は、次に掲げる事業を行う。

- （1）被爆及び平和に関する資料の調査、収集、保存及び展示に関すること。
- （2）平和学習、被爆体験の継承その他平和を考える場の提供に関すること。
- （3）平和を推進するための調査及び研究に関すること。
- （4）その他市長が必要と認める事業

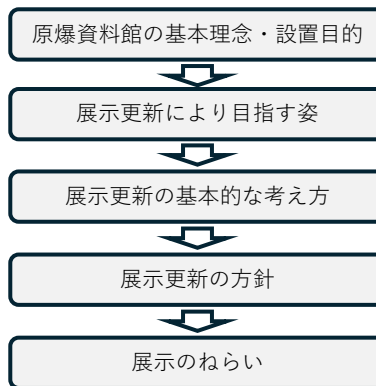
2 展示更新により目指す姿

原爆の被害を遠い昔の出来事ではなく、今の自分にも起こりうることとして受け止め、自ら平和を考え、行動することにつながる資料館になっている。

3 展示更新の基本的な考え方

館の基本理念や目的は変えず、時代の変化に応じて展示内容を更新する。

- （1）戦争から遠くなった世代に、戦争（核兵器）によって日常が壊されることを自分事として捉えてもらうことで、原爆の被害の実相や被爆者の苦しみと願いをわかりやすく伝える。
- （2）誰もが今も核兵器のある世界に生きる当事者であると同時に、平和な未来をつくる当事者であることへの気づきにつなげる。
- （3）一人ひとりが身近なところから平和について考え、行動するきっかけをつくる。



■ 展示シナリオ 01

■長崎原爆資料館 展示構成（1）

ゾーン	目 的	展示大項目	展示中項目	ねらい（展示大項目）	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
円形スロープ 円形パビリオン	戦争を知らない世代でも、戦争を他人事ではなく、自分の身にも起こりうることとして捉えられるようにする。	円形スロープ 円形パビリオン	時をさかのぼる回廊	現在から1945年8月9日11時2分に向けて、時を遡るイメージを共有しながらスロープをたどる。 そして、戦争中とはいえ、被爆前の長崎にも今の私たちと変わらない人々の暮らしがあり、そうした日常が一発の原子爆弾によって奪われてしまったことを知ってもらおう。	—	グラフィック（既存）	年代表記（既存）
ロビー		ロビー	—		—	被爆前の暮らし	被爆前の暮らしや街並みに関する写真・映像など
A. 1945年8月9日	導入部。原爆投下により、長崎の街並みや人々の暮らしが一瞬で破壊されたことを伝える。	1. 1945年8月9日	1-1. 永遠の11時2分	決して忘れてはならない1945年8月9日11時2分を象徴する資料の展示や、被爆前後の様子が比較できる長崎の街並みの写真などを紹介し、長崎に投下された原爆の威力や被害の惨状などを視覚的に理解したうえで、資料館の見学を始められるようにする。	メッセージサイン	アクリル切文字（既存）	「長崎を最後の被爆地に」多言語テキスト
			1-2. 被爆前後の長崎		—	展示ケース	破壊され停止した柱時計
			1-3. 原爆投下		被爆前後の長崎	グラフィック・写真	被爆前後の様子が比較できる写真など
					原爆投下	米軍の原爆投下映像をループ上映	原爆投下の映像など
B. 原爆による被害の実相	被爆資料を通して、原爆被害の凄まじさや非人道性、惨状を理解してもらい、このような悲劇を二度と繰り返してはならないということを伝える。	2. 原爆による被害の実相	2-1. 原子野と化した長崎の街	—現状展示を継承—			
			2-2. 浦上天主堂の惨状				
			2-3. 長崎原爆投下までの経過				
			2-4. 被爆した長崎の街				
			2-5. 長崎型原爆（ファットマン）				
			2-6. 熱線による被害				
			2-7. 爆風による被害				

■ 展示シナリオ 02

■長崎原爆資料館 展示構成（2）

ゾーン	目 的	展示大項目	展示中項目	ねらい（展示大項目）	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
B. 原爆による被害の実相	被爆資料を通して、原爆被害の凄まじさや非人道性、惨状を理解してもらい、このような悲劇を二度と繰り返してはならないということを伝える。	2. 原爆による被害の実相	2-8. 放射線による被害	被爆者がいかに長く放射線に苦しめられ、またどのように向き合ってきたのか、医学の進歩による新しい知見も含め、わかりやすく伝えることで、原爆が単なる大きな爆弾ではなく、長期的な健康被害をもたらす特殊な爆弾であることを理解してもらう。	2-8-1. 原子爆弾と放射線	グラフィック	—
					2-8-2. 初期放射線と残留放射線	グラフィック	放射線の種類と性質、初期放射線と残留放射線の模式図など
					2-8-3. 被ばく線量と人体への影響	グラフィック・写真	放射線への感受性が高い部位と主な症状を示す人体図など
					2-8-4. 急性障害と後障害	グラフィック・写真・資料	急性障害で亡くなった被爆者に関する資料など
					2-8-5. 胎内被爆	グラフィック・写真・資料	被爆した妊婦が後年に描いた絵画など
					2-8-6. 遺伝的影響	グラフィック	—
					2-8-7. 被爆医療の取り組み	グラフィック	—
					2-8-8. 医学的調査の始まり	グラフィック・写真	調教授の手記、放射線による障害の図表など
					2-8-9. 被爆医師の証言	グラフィック・写真・映像	朝長先生の証言映像など
					2-8-10. 人体影響の生涯持続性	グラフィック・写真	MDSの増加を示す図表など
			2-9. 救援・救護活動	被爆直後の困難を極めた救援・救護と、その活動に従事した人々について知ってもらう。	2-9-1. 混乱と慟哭の中で	グラフィック・写真・資料	救護所で使用された医療器具など
					2-9-2. 永井隆博士	グラフィック・写真・資料	永井隆博士の写真や遺品など
			2-10. 被爆者と遺族の戦後	被爆者や遺族のエピソードを通して、原爆が長期にわたって人々を苦しめ続けた事実を認識してもらう。	2-10-1. 身体的・精神的な苦しみ	グラフィック・写真・資料	後遺症やトラウマを抱えた人々に関する資料など
					2-10-2. 大切な人を失った悲しみ	グラフィック・写真・資料	家族や友人を亡くした人々に関する資料など
					2-10-3. 生活における困難	グラフィック・写真・資料	原爆孤児・孤老、貧困にあえぐ人々に関する資料など
					2-10-4. 社会的な差別と偏見	グラフィック・写真・資料	就職や結婚の際に不当な扱いを受けた人々に関する資料など
			2-11. 被爆者の訴え	—現状展示を継承—	—	—	—

■ 展示シナリオ 03

■長崎原爆資料館 展示構成 (3)

ゾーン	目 的	展示大項目	展示中項目	ねらい（展示大項目）	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
C. 核兵器のない 世界を目指して	原爆投下に至る歴史 や戦後の核兵器開発 競争、長崎の平和に 向けた歩みを紹介し、 平和について考える きっかけを提供する。	休憩スペース	—	—	—	—	—
		3. 二つの世界大戦	象徴展示：核兵器の誕生	歴史をきちんと見つめる ことが未来につながると いう姿勢のもと、原爆投 下の背景にあった歴史や 原爆の開発から投下に至 るまでの道のりを客観的 かつ多角的な視点からわ かりやすく説明すること で、戦争から遠くなった 世代が戦争の愚かさや核 兵器の非人道性について 考えられるようにする。	原子爆弾（模型）	原寸模型	ガジェットの原寸模型 AR：原子爆弾さく裂の仕組み
			兵器の開発と戦い方の変容		グラフィック・写真	毒ガスや戦車、飛行機の写真 など	
			3-1. 第一次世界大戦 平和に向けた 国際秩序の形成		3-1-1. 世界戦争への道	グラフィック・写真	帝国主義の風刺画など
					3-1-2. 総力戦と新兵器の出現	グラフィック・写真・資料・ 映像	新兵器に関する写真など
					3-1-3. 平和主義と国際協調体制 の確立	グラフィック・写真	国際連盟の写真など
					3-1-4. 戦闘行為の規制と戦争の 違法化	グラフィック・写真・資料	パリ不戦条約に関する写真など
			3-2. 第二次世界大戦 戦争へ向かう日本と 国際社会		3-2-1. 満州事変と国際連盟 からの脱退	グラフィック・写真・資料・ 映像	満州事変に関する写真など
					3-2-2. 日中戦争の拡大と長期化	グラフィック・写真・資料・ 映像	日中戦争に関する写真など
					3-2-3. 第二次世界大戦とアジア・ 太平洋戦争の勃発	グラフィック・写真	第二次世界大戦に関する写真 など
					3-2-4. 世界戦争の実相と展開	グラフィック・写真・資料・ 映像	第二次世界大戦で行われた空襲 に関する写真など
			3-3. 核時代の幕開け 原子爆弾の開発と投下		3-3-1. 原爆の開発と実用化	グラフィック・写真・資料・ 映像	モード委員会報告書の写真など
					3-3-2. 原爆の使用決定	グラフィック・写真・資料	ルーズベルト大統領と チャーチル首相の写真など
					3-3-3. 原爆投下に反対する人々	グラフィック・写真・資料	ジョージ・マーシャルの写真 など
					3-3-4. 広島・長崎への原爆投下	グラフィック・写真	原爆投下の目標とされた都市の 図など
			戦時下の長崎		1. 長崎と浦上	グラフィック・写真・映像	被爆前の長崎の映像など
					2. 軍需産業都市	グラフィック・写真・模型・ 資料	戦艦武蔵や魚雷の模型など
					3. 長崎から戦場へ	グラフィック・写真・資料	現役兵証書や寄せ書き日の丸 など
					4. 勤労動員の日々	グラフィック・写真・資料	勤労動員に従事した学生の日記 など
					5. 銃後の暮らし	グラフィック・写真・資料	千人針や慰問袋など
					6. 空襲と疎開	グラフィック・写真・資料	防空頭巾や焼夷弾の筒など

■ 展示シナリオ 04

■長崎原爆資料館 展示構成（4）

ゾーン	目 的	展示大項目	展示中項目	ねらい（展示大項目）	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
C. 核兵器のない 世界を目指して	原爆投下に至る歴史 や戦後の核兵器開発 競争、長崎の平和に 向けた歩みを紹介し、 平和について考える きっかけを提供する。	4. 核兵器の脅威	没入体験型展示： 核実験映像による イマーシブ体験	核兵器の開発をめぐる複雑 な歴史や国際情勢、そして 近年、核兵器使用の危険性 が高まっていることを伝え ることで、誰もが核兵器が 存在する世界に生きる当事 者であると自覚してもらう とともに、被爆地をはじめ、 世界の多くの人々が核兵器廃 絶のための活動に取り組ん でいることを知ってもらう。	原水爆実験映像	体験型映像	水爆実験の映像（3面映像） など
			4-1. 東西冷戦と 核兵器開発競争		4-1-1. 原子力の国際管理の失敗	グラフィック	冷戦の構造を示す地図など
					4-1-2. 原子爆弾から水素爆弾へ	グラフィック・写真・資料	水爆実験の写真、世界終末時計 に関する資料など
					4-1-3. 第五福竜丸事件と 原水爆禁止運動	グラフィック・写真・資料・ 模型	第五福竜丸事件に関する資料 など
					4-1-4. 世界が最も核戦争に 近づいた日	グラフィック・写真	キューバ危機の写真など
					4-1-5. 核拡散防止への取組み	グラフィック・写真・資料	核兵器廃絶への取組みに関する 写真や資料など
			4-2. 新たな核リスクの出現		4-2-1. 核軍縮の前進とアジア・ 中東での核拡散	グラフィック・写真・資料	新興核保有国の核開発に関する 資料など
					4-2-2. 核兵器関連物質と開発 技術の流出	グラフィック	核の闇市場に関する図など
					4-2-3. 核テロの危険性	グラフィック・写真	想定される核テロの図など
			4-3. 岐路に立つ国際社会		4-3-1. 核使用リスクの高まり	グラフィック・映像	核兵器使用のシミュレーション など
					4-3-2. 弱体化する国際的枠組み と核のタブー	グラフィック・写真・資料	「核の脅し」を報じる新聞記事 など
					4-3-3. 核兵器禁止条約の発効	グラフィック・写真・資料	核兵器禁止条約の採択時の写真 など
					4-3-4. 日本被団協の ノーベル平和賞受賞	グラフィック・写真・資料	ノーベル平和賞の授賞式の写真 など
			世界の被爆者に関する展示		—	グラフィック・写真・映像	核実験の被害者に関する写真 など

■ 展示シナリオ 05

■長崎原爆資料館 展示構成 (5)

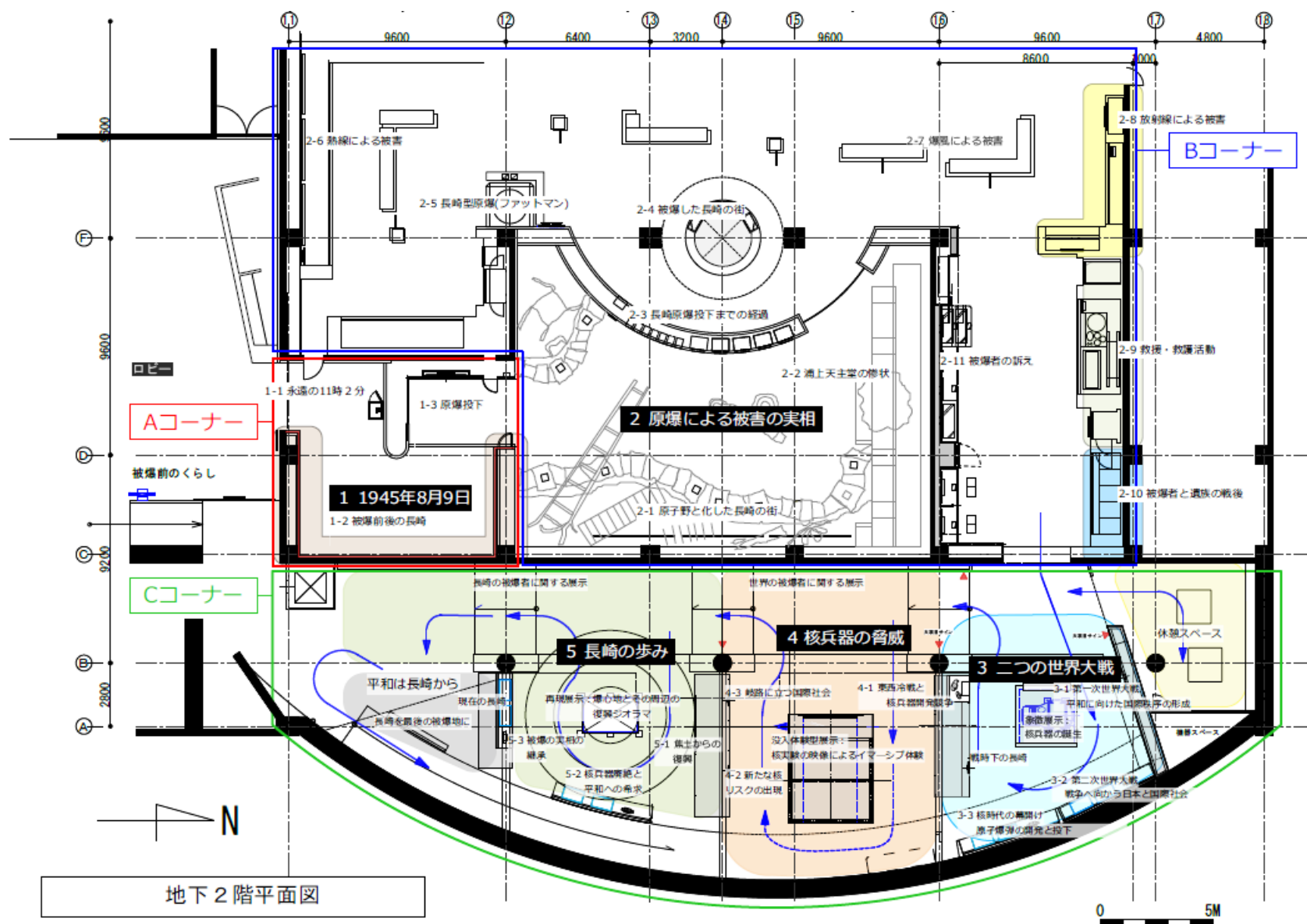
ゾーン	目 的	展示大項目	展示中項目	ねらい（展示大項目）	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
C. 核兵器のない 世界を目指して	原爆投下に至る歴史 や戦後の核兵器開発 競争、長崎の平和に 向けた歩みを紹介し、 平和について考える きっかけを提供する。	5. 長崎の歩み	再現展示： 爆心地とその周辺の 復興ジオラマ	長崎の平和と核兵器廃絶 に向けた取組みが過去から 現在に至るまで絶え間 なく続いていることを示 すことで、長崎市民の平 和と核兵器廃絶に対する 願いに共感してもらい、 未来へ受け継いでもらう。	原爆投下から10年が経過した 爆心地付近	原爆投下から10 年が経過した 爆心地付近の様子： 縮小ジオラマ AR：被爆直後、1955年、 現在の写真・映像	原爆投下から10 年後の爆心地 付近のジオラマ
			5-1. 焦土からの復興		5-1-1. 被爆後の暮らし	グラフィック・写真・資料・ 映像	被爆後の長崎の映像など
					5-1-2. 占領軍の駐屯と 都市機能の復旧	グラフィック・写真	長崎に進駐した米軍に関する 資料など
					5-1-3. 慰霊祭の開催と平和祈念	グラフィック・写真・資料	平和宣言に関する資料など
					5-1-4. 長崎国際文化都市建築法	グラフィック・写真・資料	平和記念事業に関する資料など
			5-2. 核兵器廃絶と 平和への希求		5-2-1. 原水爆禁止運動の始まり	グラフィック・写真・資料	原水禁運動の写真や被爆者 健康手帳など
					5-2-2. 広がる反核・平和運動	グラフィック・写真	反核・平和に向けた市民運動の 写真など
					5-2-3. 市民と行政の連携	グラフィック・写真	市民と長崎市の協働事業に 関する資料など
					5-2-4. ナガサキから世界へ	グラフィック・写真・資料	海外で開催された原爆展や被爆 者講話の写真など
			5-3. 被爆の実相の継承		5-3-1. 被爆体験を残す	グラフィック・写真・資料	原爆資料保存委員会の収集資料 など
					5-3-2. 原爆被災復元運動	グラフィック・写真・資料	復元された町の地図など
					5-3-3. 被爆遺構の保存と活用	グラフィック・写真	被爆建造物の写真など
					5-3-4. 被爆の記憶を受け継ぐ	グラフィック・写真・映像	家族・交流証言講話の写真など
			長崎の被爆者に関する展示		—	グラフィック・写真	戦後の被爆者に関する写真など
		平和は長崎から	現在の長崎	最後にあらためて「長崎 を最後の被爆地に」の メッセージを共有しても らう。	—	グラフィック	現在の稲佐山からの風景写真
			長崎を最後の被爆地に		—	グラフィック	「長崎を最後の被爆地に」 多言語テキスト

■ 展示シナリオ 06

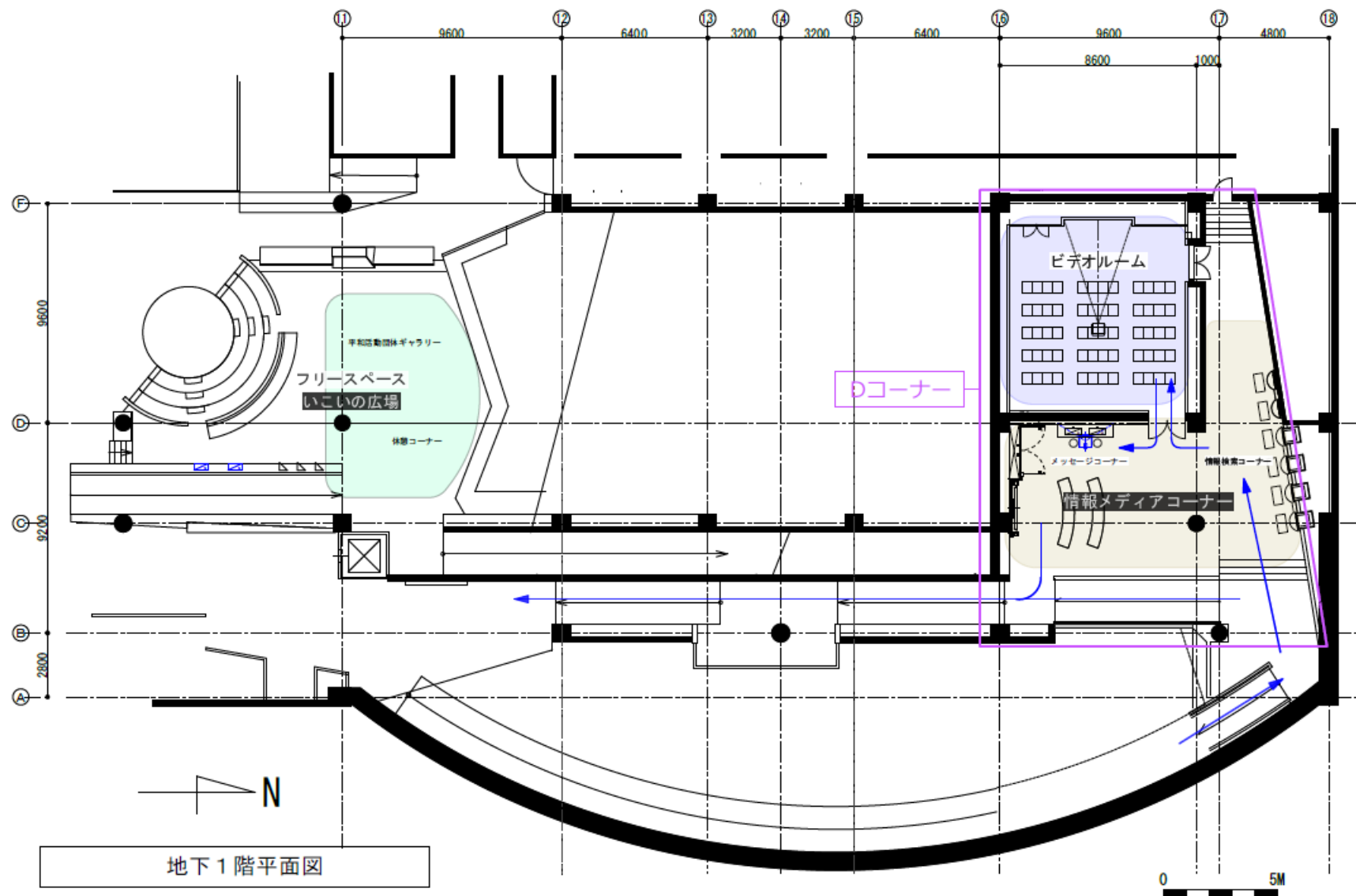
■長崎原爆資料館 展示構成（6）

ゾーン	目 的	展示大項目	展示中項目	ねらい（展示大項目）	展示小項目	主な展示手法	主な展示資料
D.ビデオルーム	来館者が自ら平和のためにできることを考え、行動するきっかけを提供する。	情報メディア コーナー	ビデオルーム	様々なメッセージ、被爆者の証言、平和団体の活動に触れることで、平和や核兵器廃絶に向けて実際に行動したり発信したりするきっかけをつかむ。		大型映像	既存映像、新規映像
					メッセージコーナー	PC＋タッチペン、映像演出	来館者のメッセージ
					大型映像	—	私たちが作る平和（既存映像） 来館者メッセージ表示
			情報検索コーナー		PC検索	Q&A（更新型）	
					PC検索	被爆証言アーカイブ	
いこいの広場	—	フリースペース	平和活動団体ギャラリー	平和や核兵器廃絶に向けて発表の場			
			休憩コーナー	—	近隣誘導サイン	—	—
全 館	—	多言語解説	—	モバイル端末（QRコード読取）、音声解説で多言語や補足説明を取得できるシステムに項目を追加。海外の方へも展示内容の概略を伝達、展示の理解を深める。	QR展示解説	H Pにキャプション 情報追加（HP追記）	既存：11カ国語対応
		音声解説	—		多言語音声展示解説	既存システムに追加	既存：12カ国語対応 音声ガイドシステム
		複製資料	—		—	—	レプリカ製作

■ 展示ゾーニング図 地下2階



■ 展示ゾーニング図 地下1階



既存ゾーン名

A. 1945年8月9日

【ゾーンの目的】

導入部。原爆投下により、長崎の街並みや人々の暮らしが一瞬で破壊されたことを伝える。

1. 1945年8月9日

【ねらい】

●1-2. 被爆前後の長崎

長崎に投下された原爆の威力や被害の惨状などを視覚的に理解したうえで、資料館の見学を始められるようにする。



■ コーナー概要

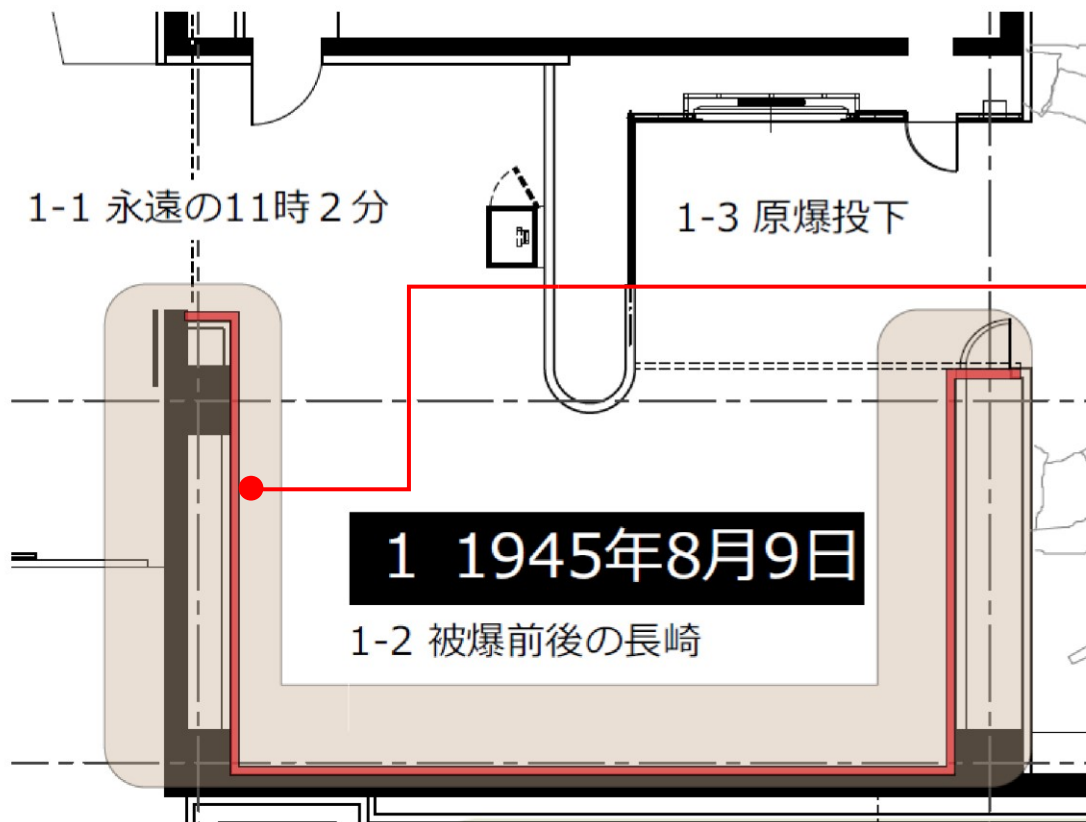
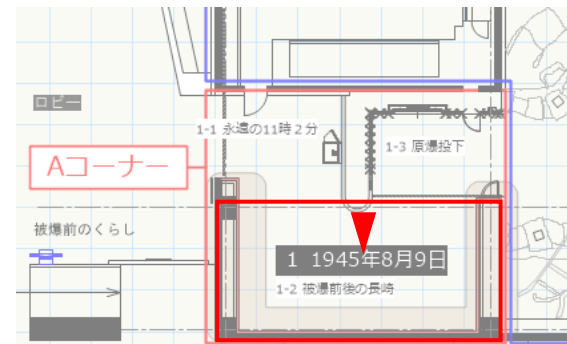
■ 1. 1945年8月9日

1-2. 被爆前後の長崎

【展示概要】

1-2. 被爆前後の長崎

被爆前後の様子が比較できる長崎の街並みの写真などを展示する。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

・被爆前後の長崎

展示手法/グラフィック・写真

(被爆前後の様子が比較できる写真など)

既存ゾーン名

B. 原爆による被害の実相

【ゾーンの目的】

被爆資料を通して、原爆被害の凄まじさや非人道性、惨状を理解してもらい、このような悲劇を二度と繰り返してはならないということを伝える。

2. 原爆による被害の実相

【ねらい】

●2-8. 放射線による被害

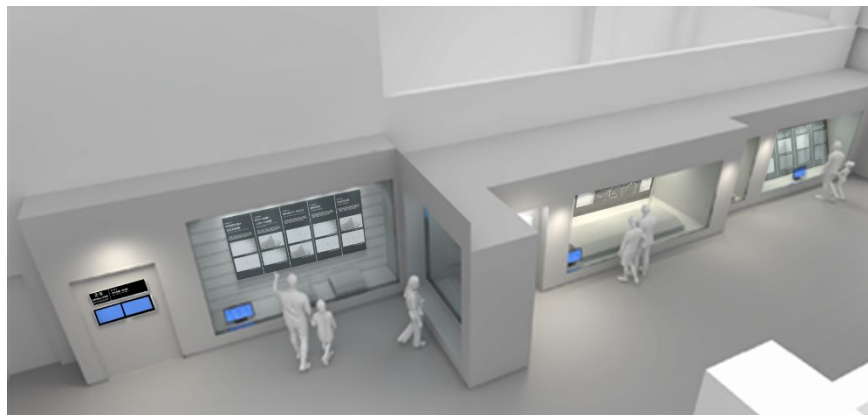
被爆者がいかに長く放射線に苦しめられ、またどのように向き合ってきたのか、医学の進歩による新しい知見も含め、わかりやすく伝えることで、原爆が単なる大きな爆弾ではなく、長期的な健康被害をもたらす特殊な爆弾であることを理解してもらう。

●2-9. 救援・救護活動

被爆直後の困難を極めた救援・救護と、その活動に従事した人々について知ってもらう。

●2-10. 被爆者と遺族の戦後

被爆者や遺族のエピソードを通して、原爆が長期にわたって人々を苦しめ続けた事実を認識してもらう。

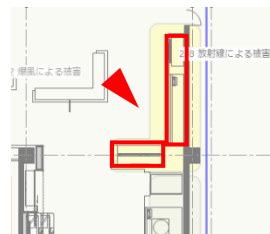
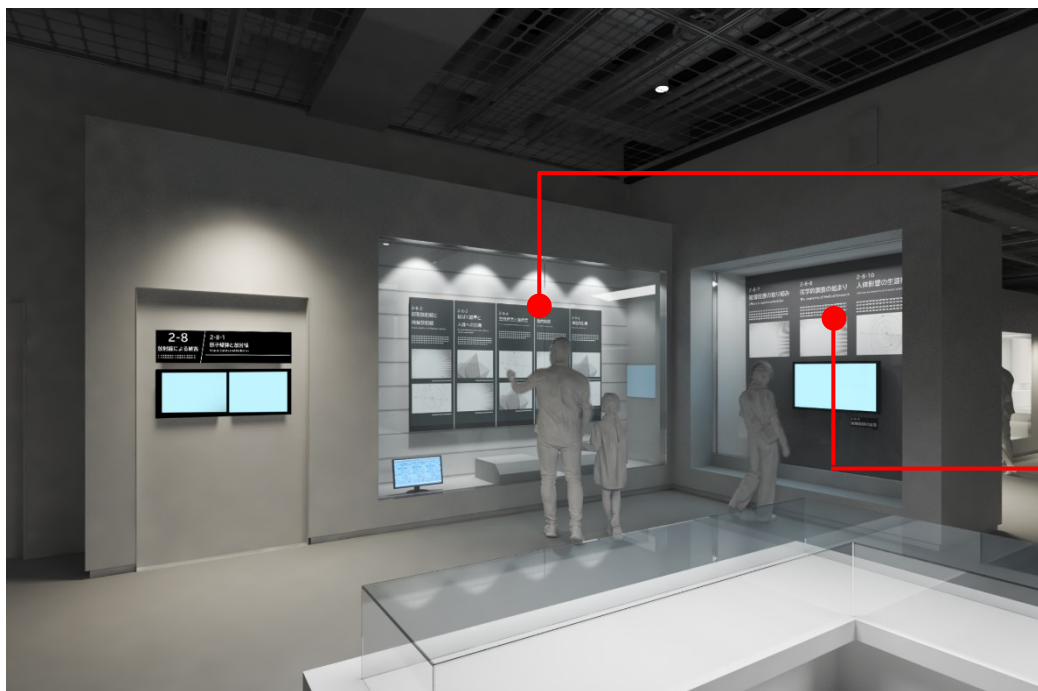


■ 2. 原爆による被害の実相

2-8. 放射線による被害

【展示概要】

原爆が通常の爆弾と異なるのは、放射線を放出することである。放射線は目に見えないが、細胞内部を傷付け、人体に深刻な影響を与える。放射線による影響は、初期のものでは皮下出血や下痢、脱毛などに現れる。そして、被爆から10年が経過すると、がんや白血病、白内障などを引き起こす。放射線による健康被害は生涯にわたって続き、被爆者は自分や子どもが重篤な病気にかかるかもしれないという不安や恐怖に脅かされている。人体への影響も未だ科学的に解明されていない中で、生涯消えることがない被爆者の労苦を紹介する。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

・2-8-1. 原子爆弾と放射線

展示手法/グラフィック

・2-8-2. 初期放射線と残留放射線

展示手法/グラフィック

(放射線の種類と性質、初期放射線と残留放射線の模式図など)

・2-8-3. 被ばく線量と人体への影響

展示手法/グラフィック・写真

(放射線への感受性が高い部位と主な症状を示す人体図など)

・2-8-4. 急性障害と後障害

展示手法/グラフィック・写真・資料

(急性障害で亡くなった被爆者に関する資料など)

・2-8-5. 胎内被爆

展示手法/グラフィック・写真・資料

(被爆した妊婦が後年に描いた絵画など)

・2-8-6. 遺伝的影響

展示手法/グラフィック

●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

・2-8-7. 被爆医療の取組み

展示手法/グラフィック

・2-8-8. 医学的調査の始まり

展示手法/グラフィック・写真

(調教授の手記、放射線による障害の図表など)

・2-8-9. 被爆医師の証言

展示手法/グラフィック・写真・映像

(朝長先生の証言映像など)

・2-8-10. 人体影響の生涯持続性

展示手法/グラフィック・写真

(MDSの増加を示す図表など)

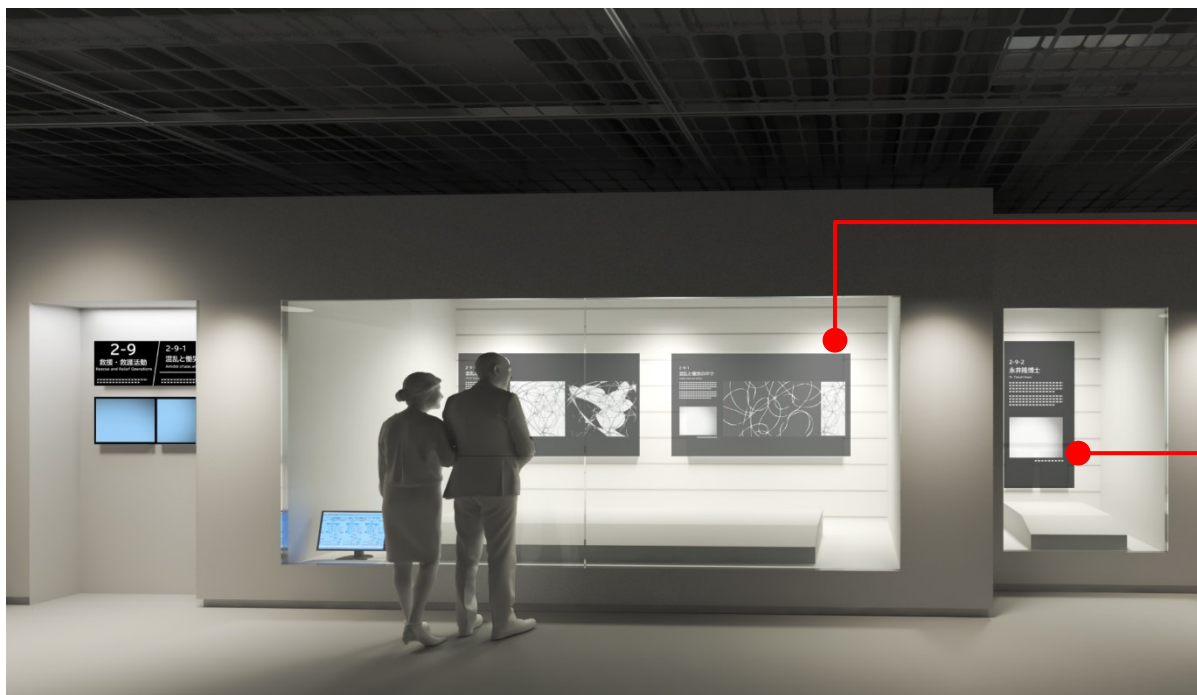
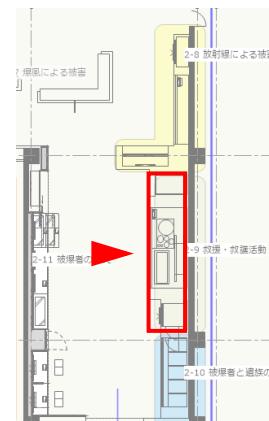
■ コーナー概要

■ 2. 原爆による被害の実相

2-9. 救援・救護活動

【展示概要】

原爆投下後、多くの負傷者が救助を待っていたが、治療の拠点となるはずの長崎医科大学は壊滅し、多くの医師や看護師も被爆した。救護活動に従事できる人や治療に必要な薬はあまりにも少なく、街は瓦礫の山で鉄道や道路も寸断されていた。そのような状況の中、必死の救護活動が始まった。夜になると、惨状を伝え聞いた周りの町から救援隊が派遣され、傷ついた人々への治療を行った。しかし、当時は放射線の影響を知る由もなく、救援隊の人々は爆心地付近に残る強い放射線にさらされることになった。過酷な状況の中で行われた救援・救護活動の実態を伝える。永井隆博士は、助教授を務める長崎医科大学付属病院で被爆した。自らも重い傷を負いながらも、負傷者の救護や原爆障害の研究に献身的に取り組んだ姿を紹介する。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

・2-9-1. 混乱と慟哭の中で

展示手法/グラフィック・写真・資料
(救護所で使用された医療器具など)

●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

・2-9-2. 永井隆博士

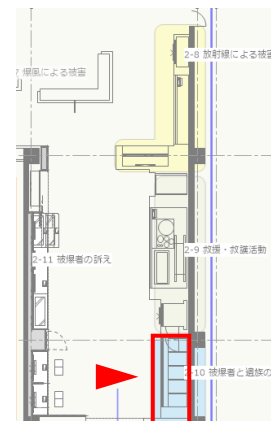
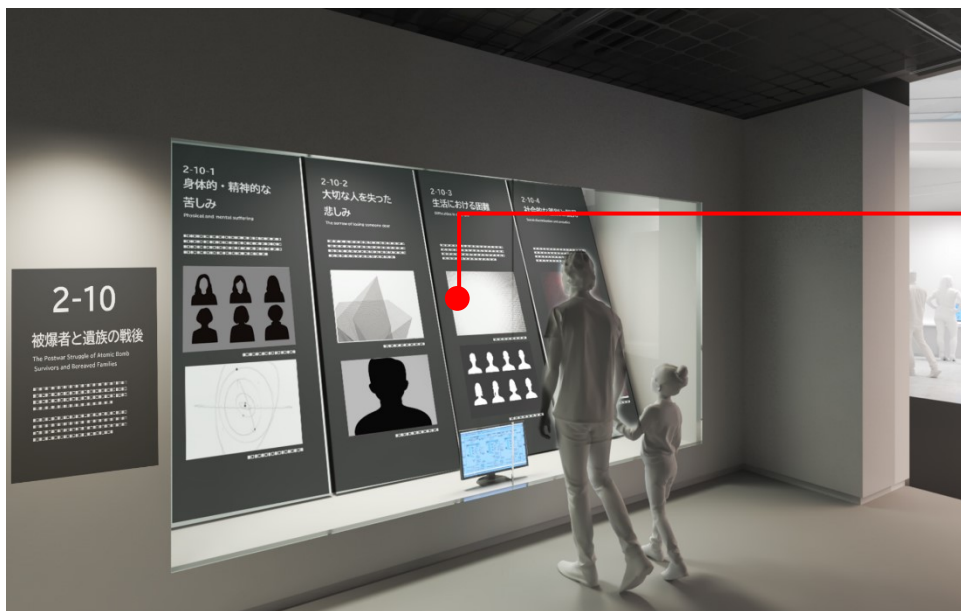
展示手法/グラフィック・写真・資料
(永井隆博士の写真や遺品など)

■ 2. 原爆による被害の実相

2-10. 被爆者と遺族の戦後

【展示概要】

原爆の惨状から辛うじて生き延びた人々も、様々な苦難に直面した。大切な家族や友人を失った悲しみや、体と心に残った傷や病を抱えて生きていかなければならなかった。廃墟となった長崎でいかに生活を立て直し、自分たちの「生きた証」や被爆体験をどのように後世へ残そうとしたのか、資料とともに紹介する。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

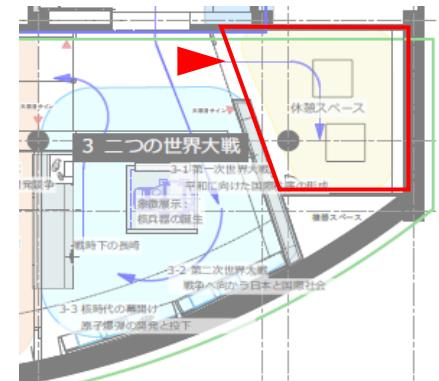
- ・ 2-10-1. 身体的・精神的な苦しみ
展示手法/ケース内斜壁グラフィック・写真・資料
(後遺症やトラウマを抱える人々に関する資料など)
- ・ 2-10-2. 大切な人を失った悲しみ
展示手法/ケース内斜壁グラフィック・写真・資料
(家族や友人を亡くした人々に関する資料など)
- ・ 2-10-3. 生活における困難
展示手法/ケース内斜壁グラフィック・写真・資料
(原爆孤児・孤老、貧困にあえぐ人々に関する資料など)
- ・ 2-10-4. 社会的な差別と偏見
展示手法/ケース内斜壁グラフィック・写真・資料
(就職や結婚の際に不当な扱いを受けた人々に関する資料など)

■ コーナー概要

休憩スペース

【概要】

博物館疲労に対処するとともに、次のコーナーに向けて心を整える。
また、壁面スペースを活用し、平和関連施設やイベントなどの情報提供を行う。



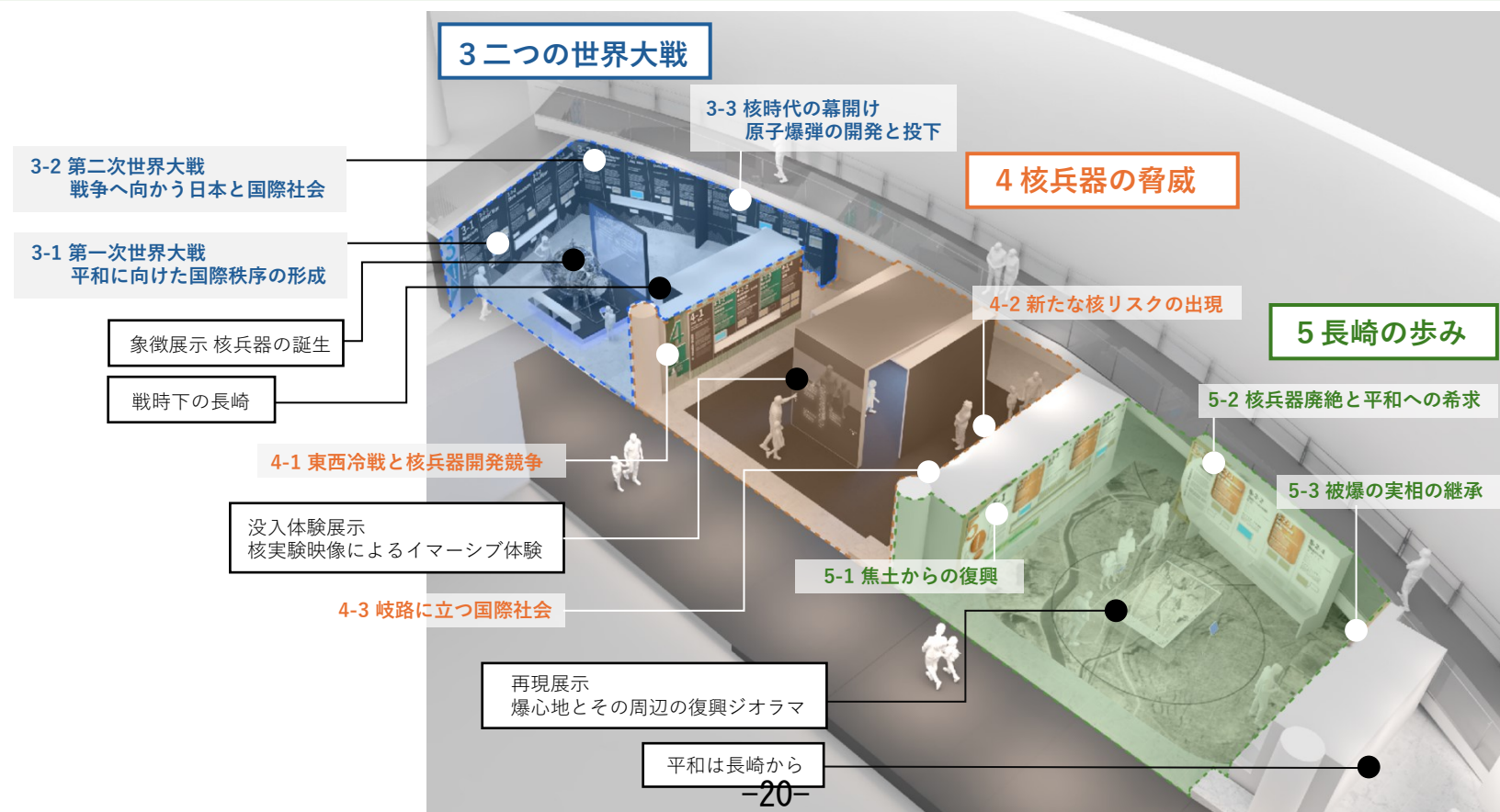
全体俯瞰図（Cコーナー）

既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。



既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

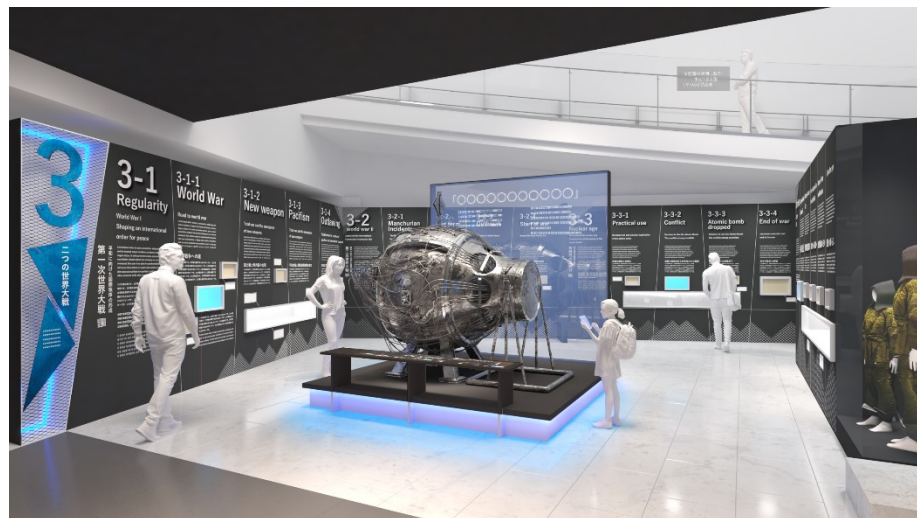
【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。

3. 二つの世界大戦

【ねらい】

歴史をきちんと見つめることが未来につながるという姿勢のもと原爆投下の背景にあった歴史や原爆の開発から投下に至るまでの道のりを客観的かつ多角的な視点からわかりやすく説明することで、戦争から遠くなった世代が戦争の愚かさや核兵器の非人道性について考えられるようにする。

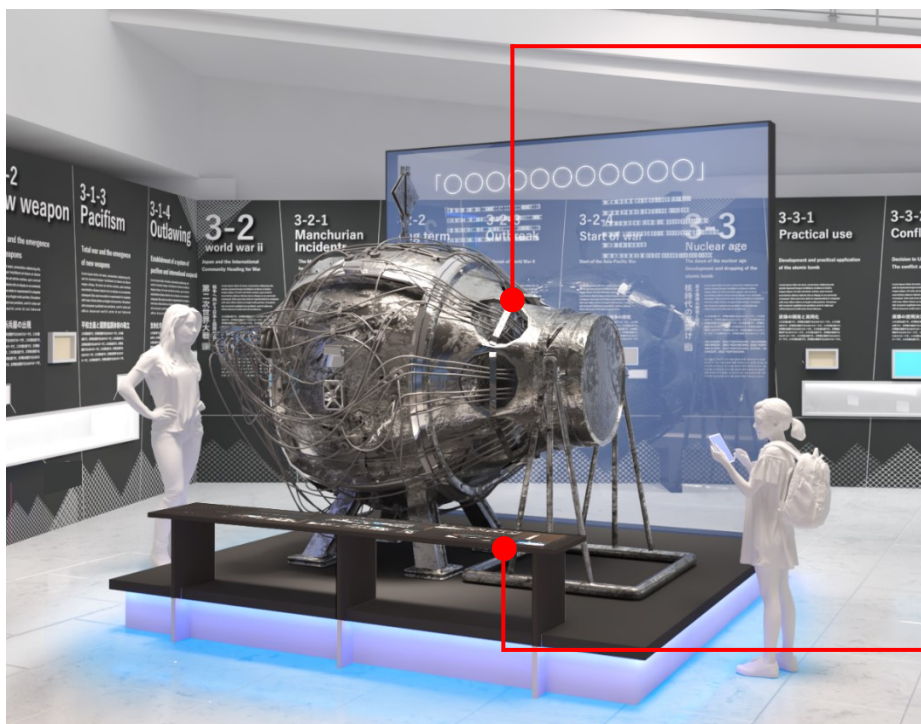
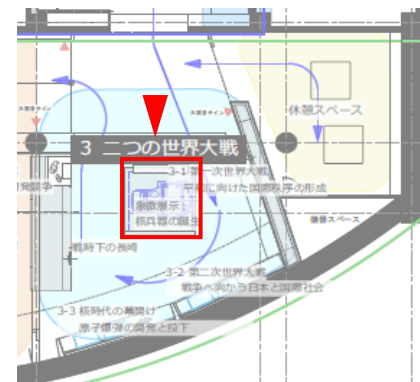


■ 3. 二つの世界大戦

象徴展示：核兵器の誕生

【展示概要】

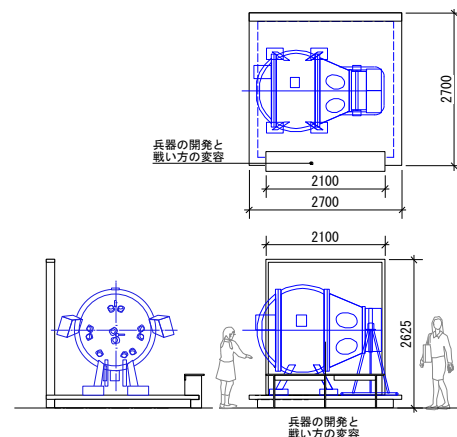
20世紀は科学技術が目覚ましい発展をとげ、人々の生活が豊かになった「科学技術の時代」であったが、二度にわたって世界大戦が起こった「戦争の時代」でもあった。そのため科学技術は兵器の開発にも利用され、最終的には大量破壊や殺戮を瞬時にもたらす大量破壊兵器・核兵器を生み出すことになる。象徴展示では、人類の滅亡をもたらすほどの力を持った核兵器の存在する「核の時代」の幕開けを象徴するものとして、人類初の核実験でさく裂した原子爆弾「ガジェット」の実物大模型を展示。その手前では、科学技術の発展や兵器の開発、戦い方の変化といった観点から核兵器の開発・使用に至った歴史的背景を説明する。



・象徴展示：核兵器の誕生

展示手法/グラフィック・写真

ガジェットの原寸模型・AR：原子爆弾さく裂の仕組み



・展示カウンター

「兵器の開発と戦い方の変容」

展示手法/グラフィック・写真

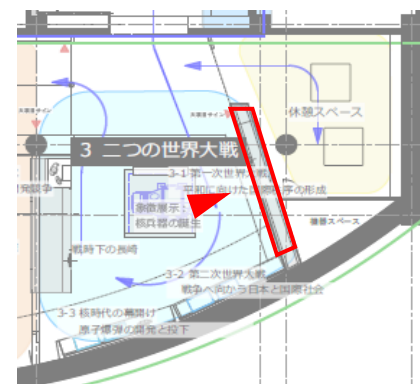
(毒ガスや戦車、飛行機の写真など)

■ 3. 二つの世界大戦

3-1. 第一次世界大戦 平和に向けた国際秩序の形成

【展示概要】

19世紀末の世界では、武力で植民地化・権益の奪取を行う帝国主義国家が現れた。そこでは勢力均衡により平和が保たれたが、民衆のナショナリズムや愛国心の高揚などを背景に国際社会はこれまでに経験したことのない世界戦争の道へと突き進んでいく。そして1914年に起こった第一次世界大戦は、軍隊だけでなく人的・物的資源の全てを戦争に動員する大規模な総力戦となり、次々と新兵器が開発・投入され、かつてない規模の犠牲を出した。こうした戦争の惨禍は、強力な平和思想をもたらし、戦後の国際社会では国際連盟や軍縮などによって戦争を防ぎ、平和を目指す国際協調体制が確立。さらに生物化学兵器の使用を禁止し、戦争を違法化する国際条約がつくられた。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・3-1-1. 世界戦争への道
展示手法/グラフィック・写真
(帝国主義の風刺画など)
- ・3-1-2. 総力戦と新兵器の出現
展示手法/グラフィック・写真・資料・映像
(新兵器に関する写真など)
- ・3-1-3. 平和主義と国際協調体制の確立
展示手法/グラフィック・写真
(国際連盟の写真など)
- ・3-1-4. 戦闘行為の規制と戦争の違法化
展示手法/グラフィック・写真・資料
(パリ不戦条約に関する資料など)

※①資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

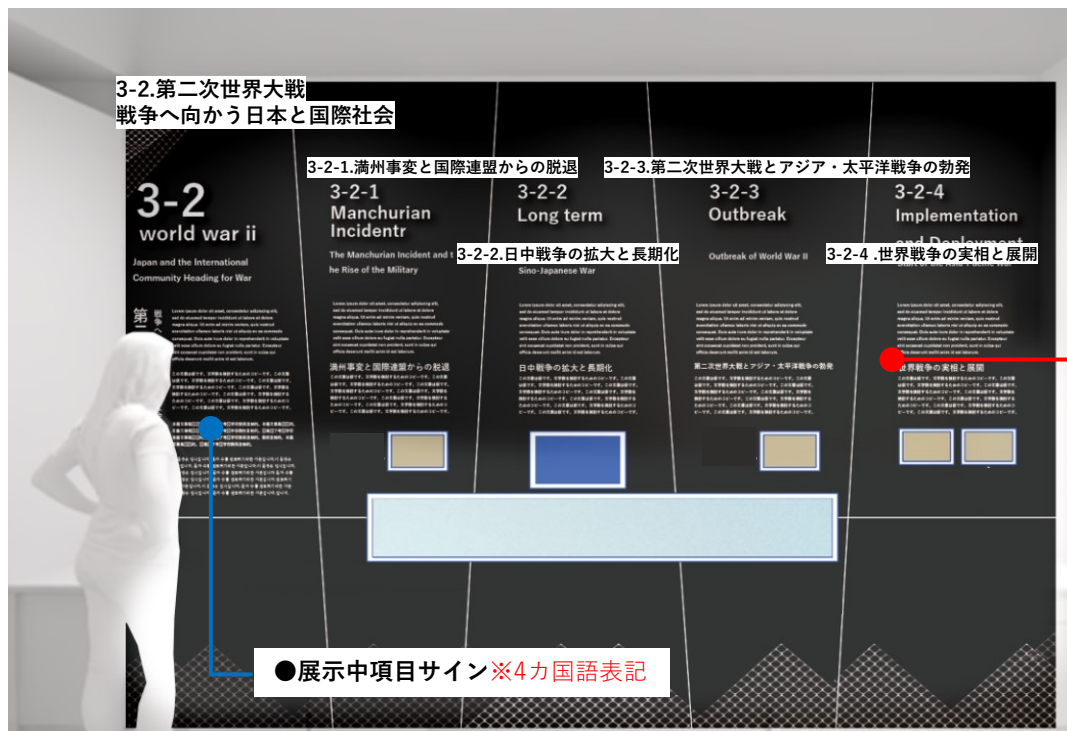
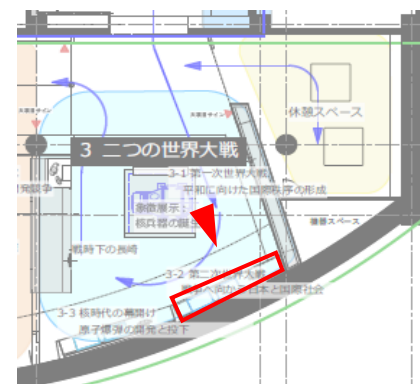
②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

■ 3. 二つの世界大戦

3-2. 第二次世界大戦 戦争へ向かう日本と国際社会

【展示概要】

第一次世界大戦後の国際協調体制は、1930年代に入ると大きく揺らいでいった。1929年の世界恐慌以降、日本やドイツ、イタリアなどから国際社会の平和を脅かす動きが出てくる。日本では深刻な経済危機や政党政治の腐敗などを背景に軍部が台頭。満州事変、国際連盟脱退、日中戦争と戦後の国際秩序から逸脱していく。さらにドイツとイタリアも日本の後に続き、ファシズムや軍国主義による政治を進める国々と民主主義を守ろうとする国々との対立は徐々に深化。国際社会は二度目の世界大戦へと向かっていった。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 3-2-1. 満州事変と国際連盟からの脱退
展示手法/グラフィック・写真・映像
(満州事変に関する写真など)
- ・ 3-2-2. 日中戦争の拡大と長期化
展示手法/グラフィック・写真・資料・映像
(日中戦争に関する写真など)
- ・ 3-2-3. 第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発
展示手法/グラフィック・写真
(第二次世界大戦に関する写真など)
- ・ 3-2-4. 世界戦争の実相と展開
展示手法/グラフィック・写真・資料・映像
(第二次世界大戦で行われた空襲に関する写真など)

※①資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

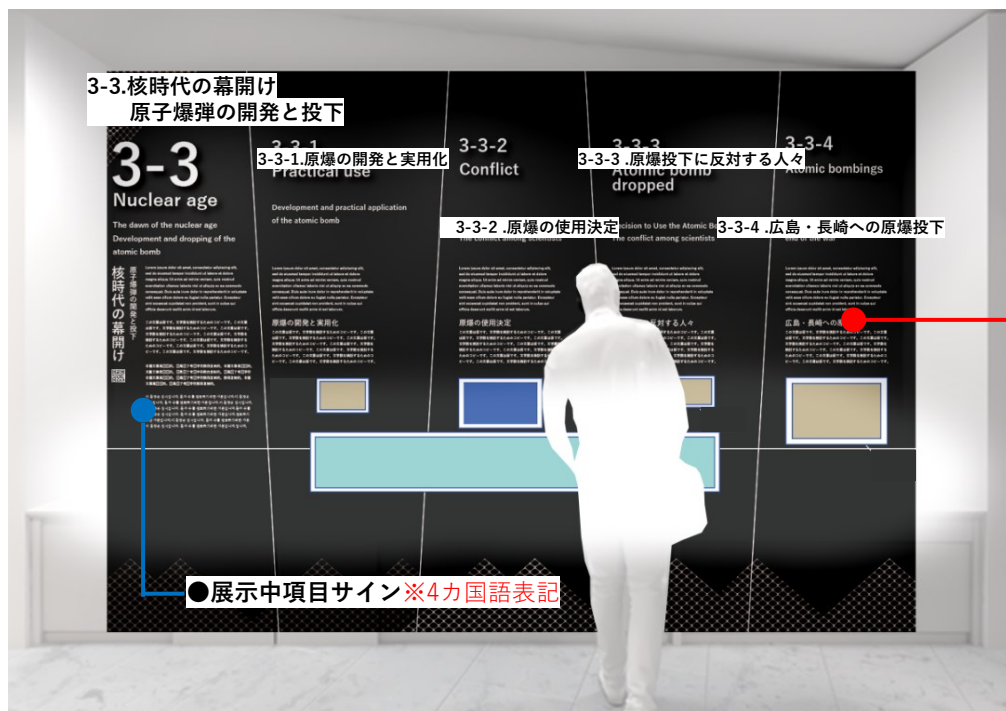
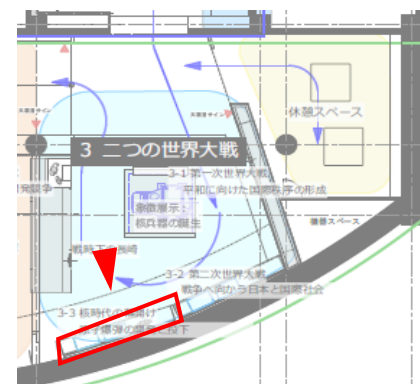
●展示中項目サイン※4カ国語表記

■ 3. 二つの世界大戦

3-3. 核時代の幕開け 原子爆弾の開発と投下

【展示概要】

第二次世界大戦の開戦により世界が戦争に飲み込まれていく中で各国は核兵器の開発に乗り出し、第一次世界大戦後の国際秩序は完全に崩壊。アメリカも無差別爆撃や原爆の開発など国際法や人道に反する行為を実施していくことになる。そして広島・長崎に原爆が投下。日本の降伏により第二次世界大戦は終結したが、「核時代」は新たに幕を開け、世界は「冷たい戦争」に突入していく。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 3-3-1. 原爆の開発と実用化
展示手法/グラフィック・写真・映像
(モード委員会報告書の写真など)
- ・ 3-3-2. 原爆の使用決定
展示手法/グラフィック・写真・資料
(ルーズベルト大統領とチャーチル首相の写真など)
- ・ 3-3-3. 原爆投下に反対する人々
展示手法/グラフィック・写真・資料
(ジョージ・マーシャルの写真など)
- ・ 3-3-4. 広島・長崎への原爆投下
展示手法/グラフィック・写真
(原爆投下の目標とされた都市の図など)

※①資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)

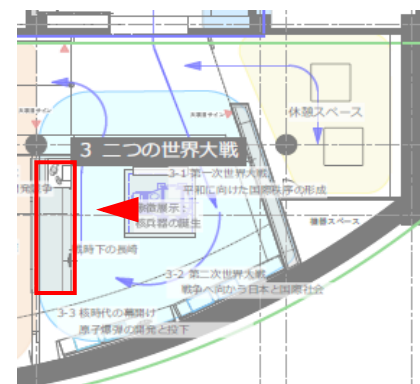
②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

■ 3. 二つの世界大戦

戦時下の長崎

【展示概要】

総力戦体制下にあった長崎では、兵士だけでなく、戦場の後方にあたる銃後の国民も戦った。とりわけ、長崎市は軍需産業都市であり、魚雷や戦艦などもつくられていた。開戦当初、長崎市民にとって戦争の脅威は遠い場所にあったが、戦局の悪化につれて空襲が激化し、8月9日を迎えることになる。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 1. 長崎と浦上
展示手法/グラフィック・写真・映像
(被爆前の長崎の映像など)
- ・ 2. 軍需産業都市
展示手法/グラフィック・写真・模型・資料
(戦艦武蔵や魚雷の模型など)
- ・ 3. 長崎から戦場へ
展示手法/グラフィック・写真・資料
(現役兵証書や寄せ書き日の丸など)
- ・ 4. 勤労動員の日々
展示手法/グラフィック・写真・資料
(勤労動員に従事した学生の日記など)
- ・ 5. 銃後の暮らし
展示手法/グラフィック・写真・映像
(千人針や慰問袋など)
- ・ 6. 空襲と疎開
展示手法/グラフィック・写真・資料
(防空頭巾や焼夷弾の筒など)

- ※①資料展示や映像は必要に応じて配置
(展示ケース:UVカットフィルム加工)
- ②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。

4. 核兵器の脅威

【ねらい】

核兵器の開発をめぐる複雑な歴史や国際情勢、そして近年、核兵器使用の危険性が高まっていることを伝えることで、誰もが核兵器が存在する世界に生きる当事者であると自覚してもらうとともに、被爆地をはじめ、世界の多くの人々が核兵器廃絶のための活動に取り組んでいることを知ってもらう。

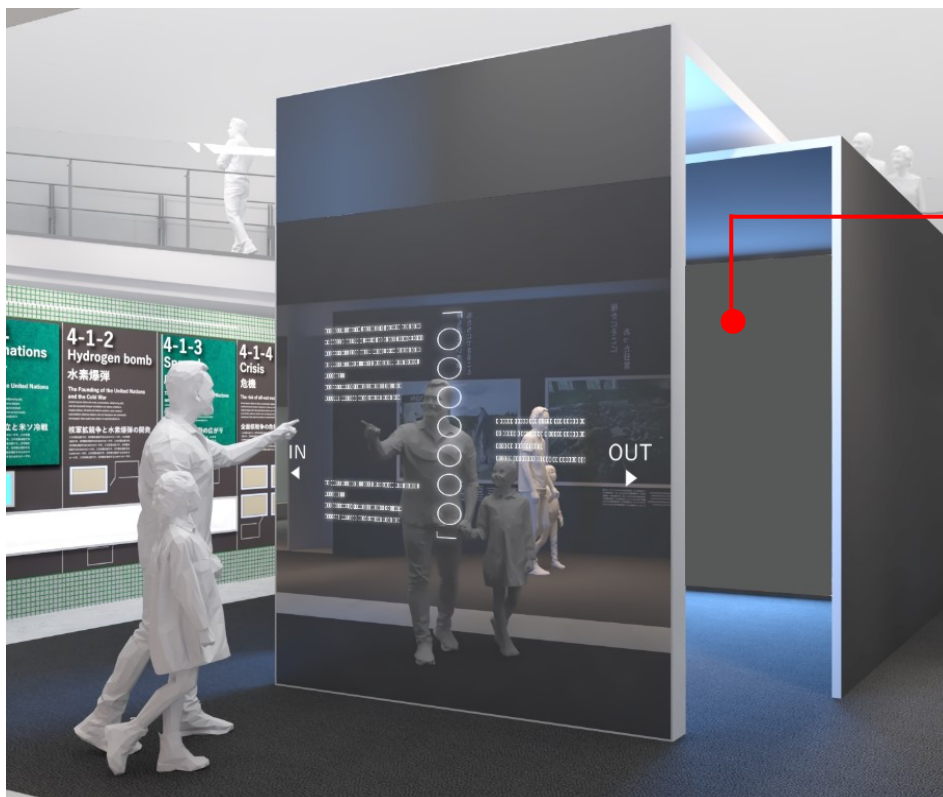
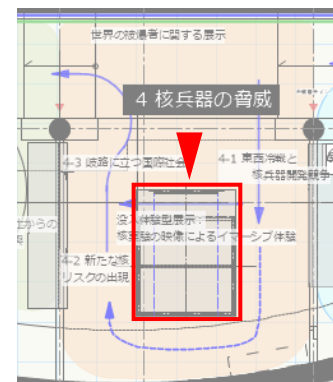


■ 4. 核兵器の脅威

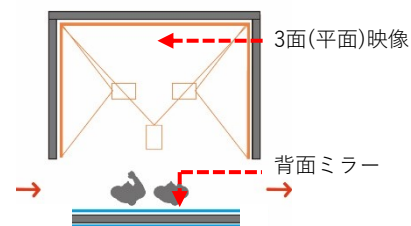
没入体験型展示：核実験映像によるイマーシブ体験

【展示概要】

1945年以降、2000回を超える核実験が行われた。多くの人々が被ばくし、現在でも深刻な健康被害を訴えている。また、地球環境にも甚大な被害を与えた。イマーシブ体験を通して、核実験が及ぼす影響を身近なものとしてとらえ、核兵器の問題に自ら向き合うための意識を涵養する。



・没入体験型展示：
核実験映像によるイマーシブ体験
展示手法/体験型映像



3面映像と背面のミラー
を組み合わせることで没入感を
向上します。

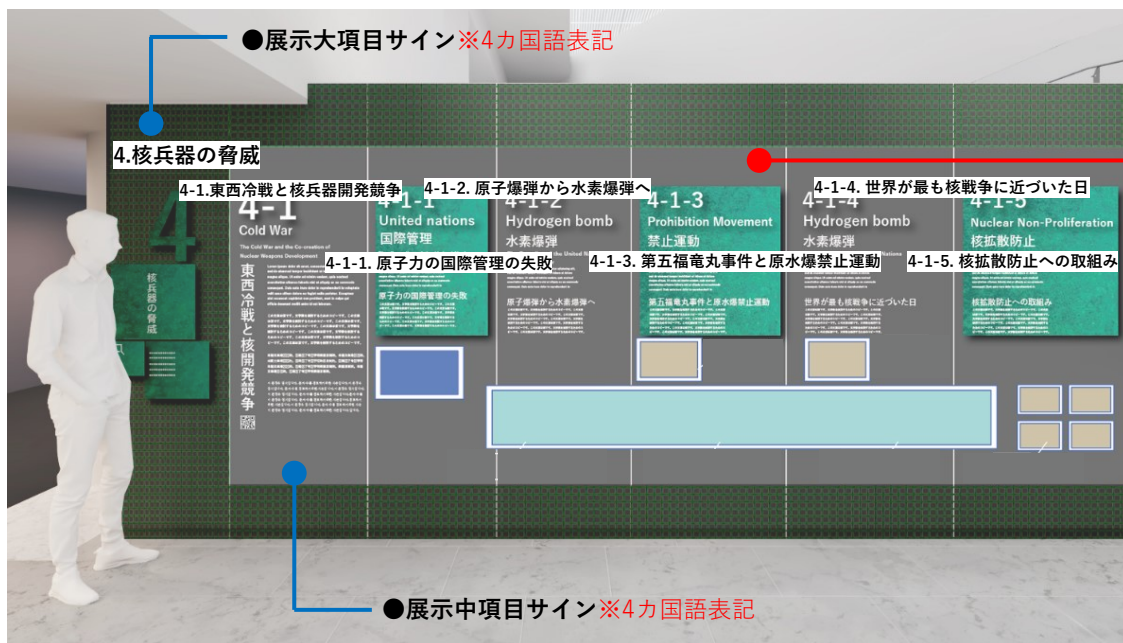
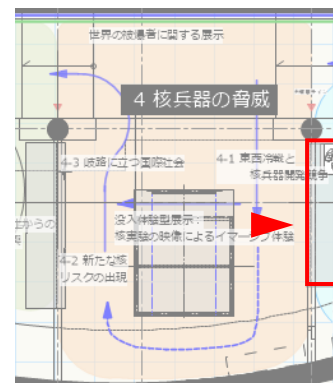


■ 4. 核兵器の脅威

4-1. 東西冷戦と核兵器開発競争

【展示概要】

第二次世界大戦後、世界の平和と安全の維持を目的に国際連合が発足した。一方で、米ソの対立は深刻化し、核軍拡競争がエスカレートしていく。世界各地で核実験が実施される中、第五福竜丸事件が起こり、核実験に反対する市民運動が広がる。政治レベルでは、キューバ危機により核戦争の危機に直面した。核戦争になれば、地球全体を破滅させることに気づき、核兵器を使用しないという認識が生まれ、核軍縮や核不拡散条約へとつながった。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 4-1-1. 原子力の国際管理の失敗
展示手法/グラフィック
(冷戦の構造を示す地図など)
- ・ 4-1-2. 原子爆弾から水素爆弾へ
展示手法/グラフィック・写真・資料
(水爆実験の写真や世界終末時計に関する資料など)
- ・ 4-1-3. 第五福竜丸事件と原水爆禁止運動
展示手法/グラフィック・写真・資料・模型
(第五福竜丸事件に関する資料など)
- ・ 4-1-4. 世界が最も核戦争に近づいた日
展示手法/グラフィック・写真
(キューバ危機に関する写真など)
- ・ 4-1-5. 核拡散防止への取り組み
展示手法/グラフィック・写真・資料
(核兵器廃絶への取り組みに関する写真や資料など)

※①資料展示や映像は必要に応じて配置

展示ケース：UVカットフィルム加工

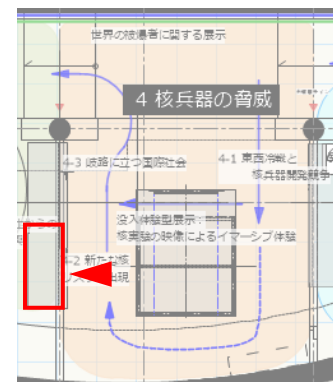
②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

■ 4. 核兵器の脅威

4-2. 新たな核リスクの出現

【展示概要】

冷戦の終結と旧ソ連の崩壊に伴う核兵器開発技術の流出や、既存の核軍縮・不拡散政策に対する反発などを背景として、アジアと中東において核拡散が進み、さらには核テロのリスクが台頭した。一方で、核軍縮・核兵器廃絶に向けて努力が重ねられた。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・4-2-1. 核軍縮の前進とアジア・中東での核拡散
展示手法/グラフィック・写真・資料
(新興核保有国の核開発に関する資料など)
- ・4-2-2. 核兵器関連物質と開発技術の流出
展示手法/グラフィック
(核の闇市場に関する図など)
- ・4-2-3. 核テロの危険性
展示手法/グラフィック・写真
(想定される核テロの図など)

※①資料展示や映像は必要に応じて配置

展示ケース：UVカットフィルム加工

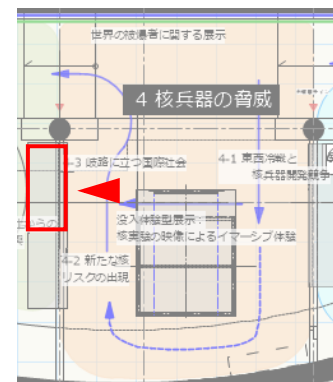
②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

■ 4. 核兵器の脅威

4-3. 岐路に立つ国際社会

【展示概要】

ポスト冷戦期も過ぎ、大国間の核軍拡競争が再燃する。加えて、既存の国際秩序を変更しようという動きや、武力侵攻に核の脅しを用いる動きが現れ、核兵器使用のリスクが急速に高まっている。一方で、核兵器の非人道性に注目が集まり、核兵器禁止に向けた国際気運が増大している。2021年に核兵器禁止条約が発効し、2024年に日本被団協が「核兵器なき世界の実現」に努力したとしてノーベル平和賞を受賞した。



● 展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・ 4-3-1. 核使用リスクの高まり
展示手法/グラフィック・映像
(核兵器使用のシミュレーションなど)
- ・ 4-3-2. 弱体化する国際的枠組みと核のタブー
展示手法/グラフィック・写真・資料
(「核の脅し」を報じる新聞記事など)
- ・ 4-3-3. 核兵器禁止条約の発効
展示手法/グラフィック・写真・資料
(核兵器禁止条約の採択時の写真など)
- ・ 4-3-4. 日本被団協のノーベル平和賞受賞
展示手法/グラフィック・写真・資料
(ノーベル平和賞の授賞式の写真など)

- ※①資料展示や映像は必要に応じて配置
展示ケース：UVカットフィルム加工
②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

● 展示中項目サイン ※4カ国語表記

既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。

5. 長崎の歩み

【ねらい】

長崎の平和と核兵器廃絶に向けた取り組みが過去から現在に至るまで絶え間なく続いていることを示すことで、長崎市民の平和と核兵器廃絶に対する願いに共感してもらい、未来へ受け継いでもらう。



■ コーナー概要

■ 5. 長崎の歩み

再現展示：爆心地とその周辺の復興ジオラマ

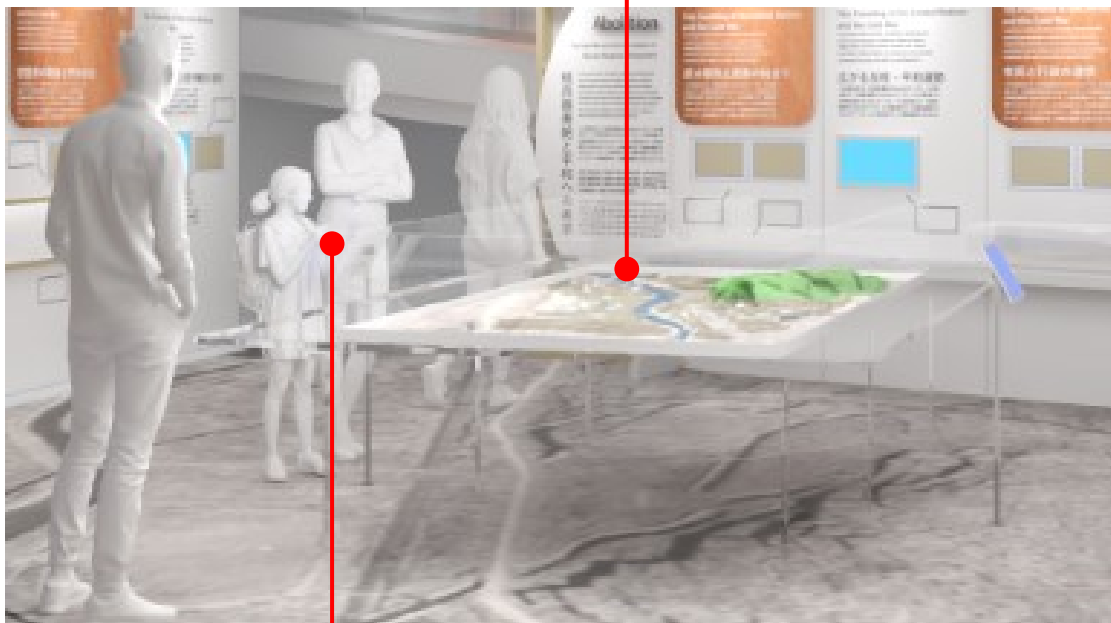
【展示概要】

平和祈念像や長崎国際文化会館が完成した1955年の爆心地周辺をジオラマで再現することで被爆から10年後の街の様子を知る。あわせてターゲットARで詳細情報を提供するとともに、現在の爆心地周辺を表示することで、焦土と化した長崎の街がどれほどの復興を遂げたのか知ってもらう。

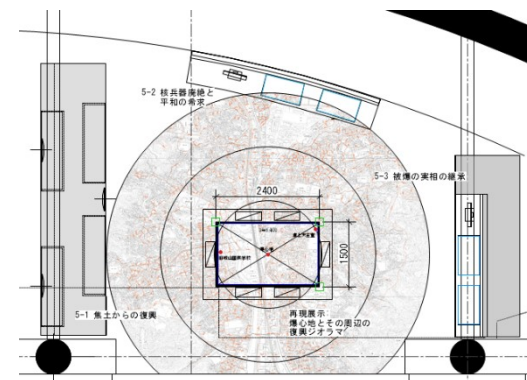
・再現展示：爆心地とその周辺の復興ジオラマ

展示手法/原爆投下から10年が経過した爆心地付近の様子 縮小ジオラマ (S=1/400)

AR：被爆直後、1955年、現在の写真・映像比較



・ターゲットAR



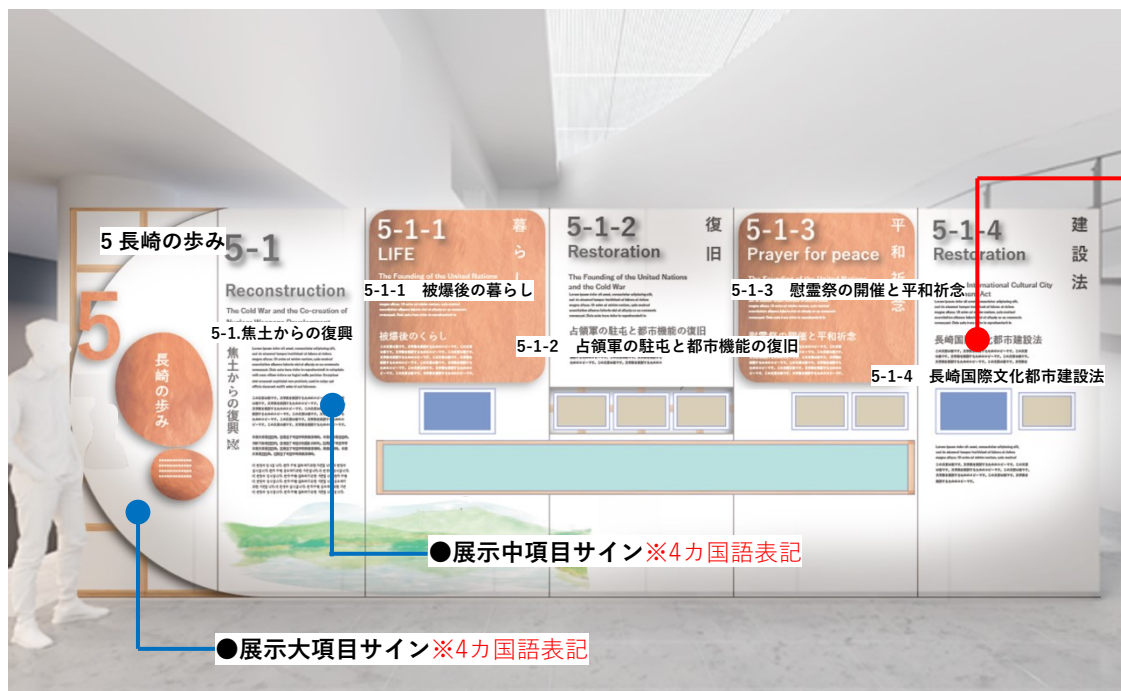
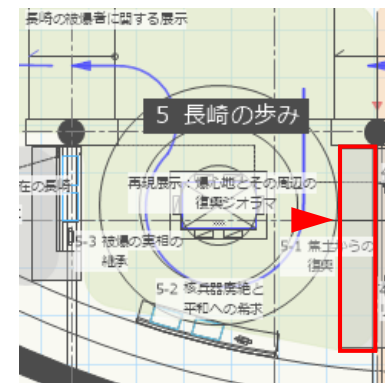
模型は縮尺1/400程度とし、旧城山国民学校と浦上天主堂が入るようにする。

■ 5. 長崎の歩み

5-1. 焦土からの復興

【展示概要】

長崎の街は原爆で焼け野原となり、「70年は草木も生えない」と言われたが、9月に入るとかすかに草木が芽生え、人々は生きる希望を見出した。やがて人々は、壊れた建物の木材などを集めて、寝起きができるほどの小屋を建て、街は少しずつ活気を取り戻していった。原爆により恐ろしい体験をした長崎市民は、平和に対する強い願いから「平和は長崎から」を合言葉に「恒久平和の理想」を達成する国際文化都市を目指してまちづくりを始めていった。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・5-1-1. 被爆後の暮らし
展示手法/グラフィック・写真・資料・映像
(被爆後の長崎の映像など)
- ・5-1-2. 占領軍の駐屯と都市機能の復旧
展示手法/グラフィック・写真
(長崎に進駐した米軍に関する資料など)
- ・5-1-3. 慰霊祭の開催と平和祈念
展示手法/グラフィック・写真・資料・映像
(平和宣言に関する資料など)
- ・5-1-4. 長崎国際文化都市建設法
展示手法/グラフィック・写真・資料
(平和記念事業に関する資料など)

※①資料展示や映像は必要に応じて配置

展示ケース：UVカットフィルム加工

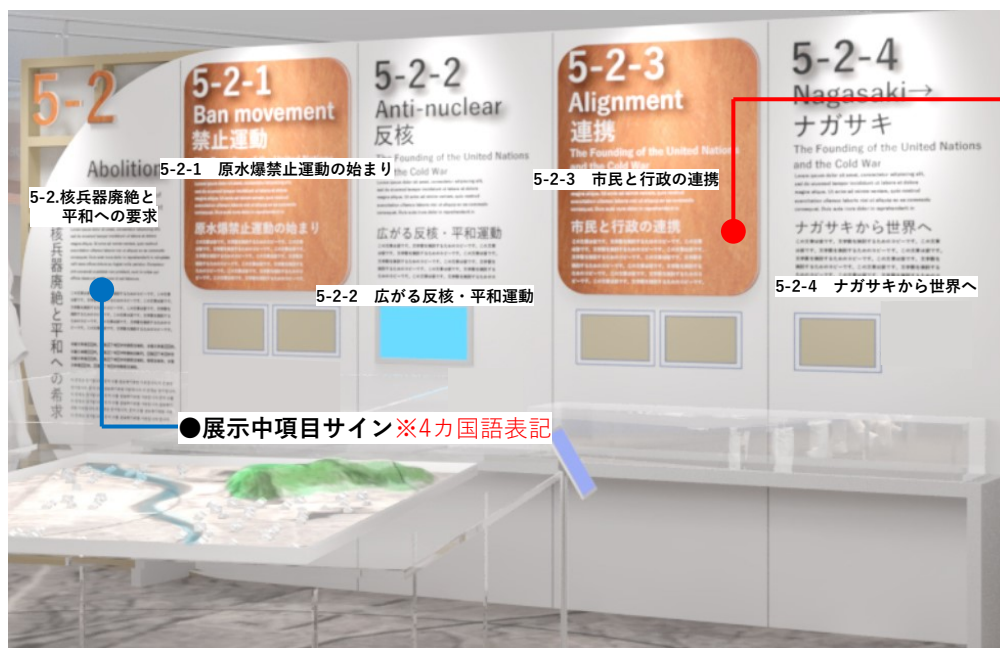
②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

■ 5. 長崎の歩み

5-2. 核兵器廃絶と平和への要求

【展示概要】

被爆から数年間はGHQのプレスコードにより原爆被害の実態が覆い隠されたため、被爆者は沈黙を強いられた。しかし、1954年の第五福竜丸事件をきっかけに原水爆禁止と被爆者援護を求める運動が起こり、長崎の被爆者は被爆体験と被爆者の実情を訴えることで運動に参加していった。こうした平和や核兵器廃絶を求める動きは市民や行政にも広がり、以来、長崎の人々は原爆被爆都市の使命として、核兵器の脅威を世界に訴え、核兵器廃絶と恒久平和の実現に向けて努力を続けている。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・5-2-1. 原水爆禁止運動の始まり
展示手法/グラフィック・写真・資料
(原水禁運動の写真や被爆者健康手帳など)
- ・5-2-2. 広がる反核・平和運動
展示手法/グラフィック・写真
(反核・平和に向けた市民運動の写真など)
- ・5-2-3. 市民と行政の連携
展示手法/グラフィック・写真
(市民と長崎市の共同事業に関する資料など)
- ・5-2-4. ナガサキから世界へ
展示手法/グラフィック・写真・資料・映像
(海外で開催された原爆展や被爆者講話の写真など)

※①資料展示や映像は必要に応じて配置

展示ケース：UVカットフィルム加工

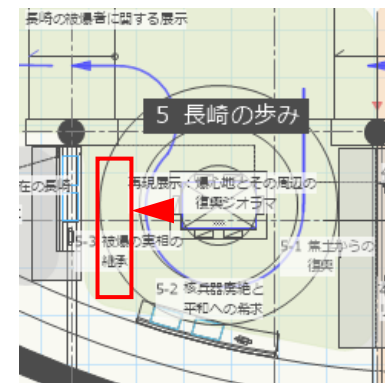
②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

■ 5. 長崎の歩み

5-3. 被爆の実相の継承

【展示概要】

長崎市では、街の復興が進み、市内の瓦礫が片付けられていく中で、貴重な被爆資料が撤去されていく状況に懸念が高まり、1949年より被爆資料の収集・保存活動が始まった。さらに原水爆禁止運動の盛り上がりや戦争を知らない世代の増加等を背景として、様々な形で被爆体験を記録し、後世へ残そうとする動きが活発になっていった。こうした被爆者や遺族の活動は若い世代に受け継がれ、現在に至っている。



●展示小項目グラフィック

※タイトル日英表記

- ・5-3-1. 被爆体験を残す
展示手法/グラフィック・写真・資料
(原爆資料保存委員会の収集資料など)
- ・5-3-2. 原爆被災復興運動
展示手法/グラフィック・写真・資料
(復元された町の地図など)
- ・5-3-3. 被爆遺構の保存と活用
展示手法/グラフィック・写真
(被爆構造物の写真など)
- ・5-3-4. 被爆の記憶を受け継ぐ
展示手法/グラフィック・写真・映像
(家族・交流証言講話の写真など)

※①資料展示や映像は必要に応じて配置

展示ケース：UVカットフィルム加工

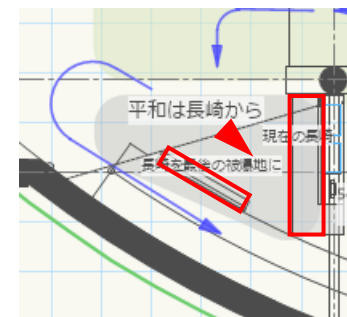
②多言語に関してはQRコード等で対応を検討する

既存ゾーン名

C. 核兵器のない世界を目指して

【ゾーンの目的】

原爆投下に至る歴史や戦後の核兵器開発競争、長崎の平和に向けた歩みを紹介し、平和について考えるきっかけを提供する。



平和は長崎から 【ねらい】

最後にあらためて「長崎を最後の被爆地に」のメッセージを共有してもらう。

●長崎を最後の被爆地に

展示室の最後に「長崎を最後の被爆地に」を世界各国の言語で表示することで心に刻んでいただく。



既存ゾーン名

D. ビデオルーム

【ゾーンの目的】

来館者が自ら平和のためにできることを考え、行動するきっかけを作る。

情報メディアコーナー 【ねらい】

常設展示や企画展を見て平和や核兵器廃絶に向けて実際に行動できる心を育む。

- ビデオルーム
- 情報メディアコーナー

様々なメッセージ、被爆者の証言、平和団体の活動に触れることで、平和や核兵器廃絶に向けて実際に行動したり、発信したりするきっかけをつかむ。



■ コーナー概要

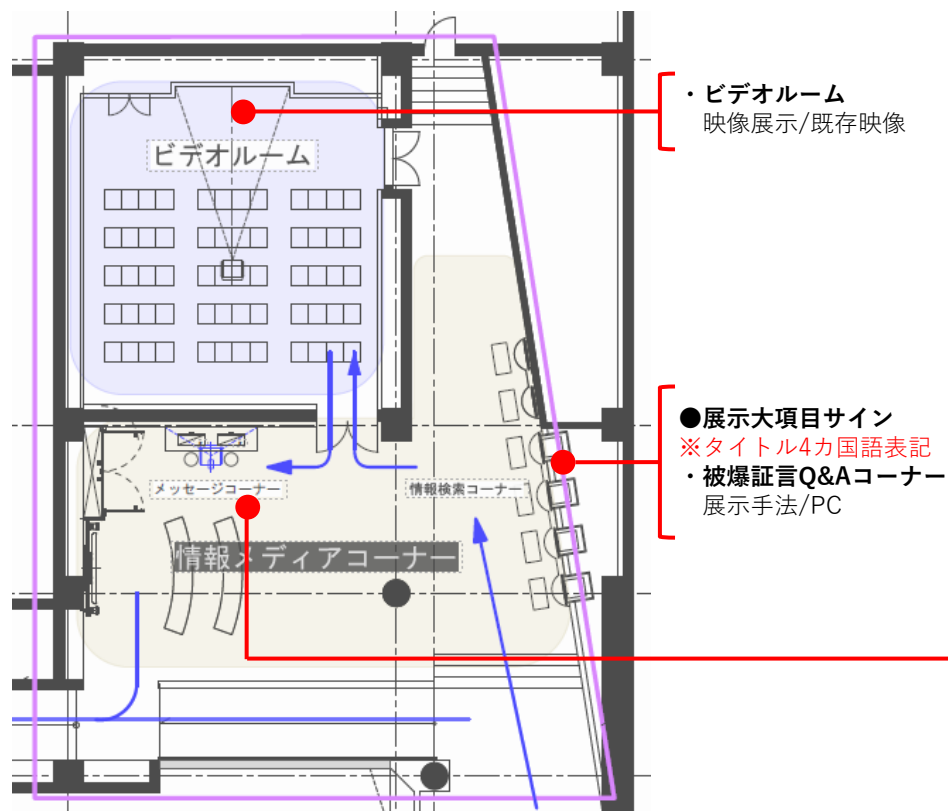
■ 情報メディアコーナー

ビデオルーム/情報メディアコーナー

【展示概要】

- ・ビデオルーム
- ・情報メディアコーナー

来館者がメッセージを残し、平和に対する想いを共有するスペースを設置する。

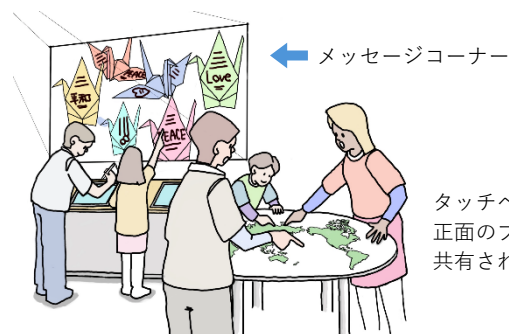


メッセージコーナー

展示を見た来館者や子どもたちの想いを蓄積・共有

展示を通して子どもたちが感じた想いやメッセージを大型映像で投影します。

核兵器の使用リスクが高まっている現在、海外の来館者の想いも共有することで、自ら平和を考えるきっかけを作ります。



タッチペンでメッセージを残すと正面のプロジェクターに投影、共有される

2 実施設計（案）に対する運営審議会での主な意見

区分	主な意見
休憩スペース	・資料館の展示規模を考えると、休憩スペースの面積も展示に利用したほうがよい。
	・休憩スペースは、B コーナーから C コーナーへ頭を切り替えるために設置したほうがよい。また、B コーナーで学んだことの整理を行う場としても活用できるだろう。
長崎の歩み	・戦後、長崎市が復興に向かっていく過程だけではなく、その陰に隠れた被爆者の苦しみなども紹介できないか検討してみてはどうか。
	・外国人被爆者にも焦点を当てた展示を行ってはどうか。
その他	・AR を活用した展示については、デジタルデバイスを所持していない人でも体験できるように配慮してほしい。

※ 「放射線による被害」「二つの世界大戦」「核兵器の脅威」の解説パネル（案）に対する意見は、68 ページ以降に記載。

3 長崎原爆資料館 常設展 展示項目（案）

大項目	中項目	小項目（基本設計）	小項目（修正案）	修正理由
Aコーナー 1 1945 年 8 月 9 日	1-1 永遠の 11 時 2 分			
	1-2 被爆前後の長崎			
	1-3 原爆投下			
Bコーナー 2 原爆による被害の実相	2-1 原子野と化した長崎の街			
	2-2 浦上天主堂の惨状			
	2-3 長崎原爆投下までの経過			
	2-4 被爆した長崎の街			
	2-5 長崎型原爆（ファットマン）			
	2-6 熱線による被害			
	2-7 爆風による被害			
	2-8 放射線による被害	2-8-1 原子爆弾と放射線	2-8-1 原子爆弾と放射線	2-8-2 について、取り上げる内容を考慮して細分化する必要があるため、2-8-2 から 2-8-6 までの 5 項目とした。
		2-8-2 放射線が人体に及ぼす影響	2-8-2 初期放射線と残留放射線	
			2-8-3 被ばく線量と人体への影響	
			2-8-4 急性障害と後障害	
			2-8-5 胎内被爆	
			2-8-6 遺伝的影響	
	2-8-3 被爆医療の取り組み		2-8-7 被爆医療の取り組み	2-8-3 について、取り上げる内容を考慮して細分化する必要があるため、2-8-7 から 2-8-10 までの 4 項目とした。
			2-8-8 医学的調査の始まり	
			2-8-9 被爆医師の証言	
			2-8-10 人体影響の生涯持続性	
	2-9 救援・救護活動	2-9-1 混乱と慟哭の中で		
		2-9-2 永井隆博士		
	2-10 被爆者と遺族の戦後	2-10-1 身体的・精神的な苦しみ		
		2-10-2 大切な人を失った悲しみ		
		2-10-3 生活における困難		
		2-10-4 社会的な差別と偏見		
	2-11 被爆者の訴え			
Cコーナー 3 二つの世界大戦	象徴展示 核兵器の誕生			
	3-1 第一次世界大戦 平和に向けた国際秩序の形成	3-1-1 世界戦争への道	3-1-1 世界戦争への道	
		3-1-2 総力戦と新兵器の出現	3-1-2 総力戦と新兵器の出現	
		3-1-3 平和主義と国際協調体制の確立	3-1-3 平和主義と国際協調体制の確立	
		3-1-4 生物化学兵器の使用禁止と戦争の違法化	3-1-4 戦闘行為の規制と戦争の違法化	3-1-4 は「生物化学兵器の使用と戦争の違法化」としていたが、1920 年代は生物化学兵器の使用を禁止する「ジュネーヴ議定書」以外も無差別爆撃を違法とする「ハーグ空戦規則案」が採択されているため、より広い意味をおさえるものとして「戦闘行為の規制と戦争の違法化」に名称を変更している。
	3-2 第二次世界大戦 戦争へ向かう日本と国際社会	3-2-1 満州事変と軍部の台頭	3-2-1 満州事変と国際連盟からの脱退	3-2-1 と 3-2-2 は「満州事変と軍部の台頭」と「国際連盟からの脱退」の二つに分けていたが、ここは一つにまとめたほうが満州事変から国際連盟脱退へのつながりがわかりやすくなるため、統合している。
		3-2-2 国際連盟からの脱退		
		3-2-3 日中戦争の長期化	3-2-2 日中戦争の拡大と長期化	3-2-3 は「日中戦争の長期化」としていたが、日中戦争は戦線を拡大したことで戦争が長期化したため、「拡大」の言葉を追加した。
		3-2-4 第二次世界大戦の勃発	3-2-3 第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発	3-2-4 と 3-2-5 は「第二次世界大戦の勃発」と「アジア・太平洋戦争の開戦」の二つに分けていたが、欧州戦争が太平洋戦争の開戦によってヨーロッパとアジアの戦争が結びつき世界規模の戦争に拡大したことを鑑みると、3-2-3 を第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発でまとめ、3-2-4 として戦争の被害が拡大した第二次世界大戦の実相に触れる方が原爆投下までのつながりがわかりやすくなるとの判断から、3-2-3 を「第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発」、3-2-4 を「世界戦争の実相と展開」に変更している。
		3-2-5 アジア・太平洋戦争の開戦	3-2-4 世界戦争の実相と展開	
	3-3 核時代の幕開け 原子爆弾の開発と投下	3-3-1 原爆の開発と実用化	3-3-1 原爆の開発と実用化	
		3-3-2 原爆の使用決定と科学者たちの葛藤	3-3-2 原爆の使用決定	3-3-2 は「原爆の使用決定と科学者たちの葛藤」としていたが、どちらも重要な内容であるため、3-3-2 「原爆の使用決定」と 3-3-3 「原爆投下に反対する人々」の二つに分けた。なお、3-3-3 を「原爆投下に反対する人々」としたのは原爆投下に反対したのは科学者だけでなく軍人もいたためである。項目を増やした分、もともと 3-3-4 にあった「日本の降伏と終戦」は「広島・長崎への原爆投下」に内容を入れ込んでいる。
		3-3-3 広島・長崎への原爆投下	3-3-3 原爆投下に反対する人々	
		3-3-4 日本の降伏と終戦	3-3-4 広島・長崎への原爆投下	

大項目	中項目	小項目（基本設計）	小項目（修正案）	修正理由
	戦時下の長崎	1 長崎と浦上		
		2 軍需産業都市		
		3 長崎から戦場へ		
		4 勤労働員の日々		
		5 銃後の暮らし		
		6 空襲と疎開		
Cコーナー 4 核兵器の脅威	没入体験型展示 核実験映像によるイマーシブ体験			
	4-1 東西冷戦と核兵器開発競争	4-1-1 国際連合の設立と米ソ冷戦	4-1-1 原子力の国際管理の失敗	記述内容に合わせて修正した。
		4-1-2 核軍拡競争と水素爆弾の開発	4-1-2 原子爆弾から水素爆弾へ	
		4-1-3 核兵器廃絶運動の広がり	4-1-3 第五福竜丸事件と原水爆禁止運動	
		4-1-4 全面核戦争の危機	4-1-4 世界が最も核戦争に近づいた日	
		4-1-5 核軍縮・不拡散政策と問題点	4-1-5 核不拡散への取組み	
	4-2 新たな核リスクの出現	4-2-1 冷戦の終結と核軍縮の前進	4-2-1 核軍縮の前進とアジア・中東での核拡散	冷戦の終結後に米ソ（ロ）の核軍縮が前進した一方で、アジアと中東での核拡散が発生したという構成にするため、4-2-1 と 4-2-3 を統合した。
		4-2-2 核兵器開発技術の流出	4-2-2 核兵器関連物質と開発技術の流出	記述内容に合わせて修正した。
		4-2-3 アジアと中東における核拡散	4-2-3 核テロの危険性	
		4-2-4 核テロの危険性と対策		
	4-3 岐路に立つ国際社会	4-3-1 核使用リスクの高まり	4-3-1 核使用リスクの高まり	記述内容に合わせて修正した。
		4-3-2 核抑止の限界と脆弱性	4-3-2 弱体化する国際的枠組みと核のタブー	
		4-3-3 核兵器禁止条約の発効	4-3-3 核兵器禁止条約の発効	
		4-3-4 日本被団協のノーベル平和賞受賞	4-3-4 日本被団協のノーベル平和賞受賞	
	世界の被爆者などに関する展示			
Cコーナー 5 長崎の歩み	再現展示 爆心地とその周辺の復興ジオラマ			
	5-1 焦土からの復興	5-1-1 被爆後の暮らし		
		5-1-2 占領軍の駐屯と都市機能の復旧		
		5-1-3 慰霊祭の開催と平和祈念		
		5-1-4 長崎国際文化都市建設法		
	5-2 核兵器廃絶と平和への希求	5-2-1 原水爆禁止運動の始まり		
		5-2-2 広がる反核・平和運動		
		5-2-3 市民と行政の連携		
		5-2-4 ナガサキから世界へ		
	5-3 被爆の実相の継承	5-3-1 被爆体験を残す		
		5-3-2 原爆被災復元運動		
		5-3-3 被爆遺構の保存と活用		
		5-3-4 被爆の記憶を受け継ぐ		
	長崎の被爆者などに関する展示			

※項目名は、今後の検討状況によって適宜修正する。

4 長崎原爆資料館 常設展 解説パネル原稿（案）

B コーナー「2. 原爆による被害の実相」

2-8. 放射線による被害

2-8-1. 原子爆弾と放射線

原子爆弾は従来の火薬による爆弾とは異なり、人体に深刻な影響が及ぶ放射線を放出しました。放射線によって傷ついた細胞は、修復過程で遺伝子に突然変異が生じ、時間の経過とともに白血病やがんなどを引き起こす場合があります。そのため、原爆投下時に一命を取りとめることができたとしても、被爆者は生涯にわたって不安を抱えながら生き続けなければなりませんでした。

2-8-2. 初期放射線と残留放射線

原爆放射線には、初期放射線と残留放射線の二通りがあります。初期放射線は原爆のさく裂から 1 分以内に放出されたもので、透過力の強いガンマ線や中性子線が人体の細胞を破壊しました。一方で、残留放射線には、土壌や建造物が中性子線を浴びることで放射化する誘導放射線と、放射性物質を含む粉塵が雨とともに地上へ降下する放射性降下物（フォールアウト）があります。残留放射線は、体の外から放射線を浴びる外部被ばくに加え、汚染された空気や食べ物を体内に摂取して起こる内部被ばくの原因にもなります。それにより、原爆投下直後に被爆者の救護や肉親の搜索で入市した人々も被爆しました。

グラフィック候補

- ・ 放射線の種類と性質
- ・ 初期放射線と残留放射線の模式図

2-8-3. 被ばく線量と人体への影響

人体に入り込んだ放射線の量は被ばく線量といわれ、その量が多いほど重症化しやすくなります。被ばく線量が 500 ミリシーベルトを超えると白血球が減少し、1,000 ミリシーベルト以上になると自覚症状が現れ、8,000 ミリシーベルトで致死量に至ります。長崎では、爆心地から 1 キロメートル離れた遮蔽物のない屋外で放射線を浴びた場合、ガンマ線だけでも 8,620 ミリシーベルトに達しました。同じ被ばく線量の場合、局所被ばくよりも全身被ばくの方が影響は大きくなります。また、骨髄や腸管、皮膚などは、細胞分裂が活発で放射線に対する感受性が高いため、影響を受けやすくなっています。

グラフィック候補

- ・放射線への感受性が高い部位と主な症状を示す人体図

2-8-4. 急性障害と後障害

放射線が及ぼす障害は、早期に現れる急性障害と年月を経て発生する後障害に分類されます。被爆直後は、全身の倦怠感や嘔吐、発熱、下痢、脱毛、皮下出血などの様々な急性障害が現れました。軽症の場合は回復に向かいましたが、熱線による火傷や爆風による外傷なども相まって、衰弱死する被爆者が後を絶ちませんでした。さらに、被爆から 4 か月を過ぎると火傷跡にケロイド、2 年後には白血病、10 年程度で固形がんなどの後障害が発生しました。放射線は被爆者の身体を蝕むだけでなく、精神面にも大きな影響を与えました。これまでの調査で、被爆者には心的外傷後ストレス障害（PTSD）の症状が多く見られることが分かっています。

資料候補

- ・脱毛や皮下出血などの写真
- ・急性障害で亡くなった被爆者に関する資料

グラフィック候補

- ・白血病と固形がんの模式図
- ・被爆時の年齢と性別に基づく生涯リスクの表

2-8-5. 胎内被爆

この世に生を受けていない、母親のおなかの中にいた胎児も被爆しました。とくに、妊娠8週目から15週目に大量の放射線を浴びた場合、原爆小頭症や重度の知的障害を伴う危険性が高いとされています。流産や死産に加え、新生児や乳児の死亡率も増加しており、母子ともに放射線の影響は免れませんでした。

資料候補

- ・ 被爆した妊婦が後年に描いた絵画
- ・ 小頭症患者の写真

2-8-6. 遺伝的影響

被爆者の子どもへの遺伝的影響は、当時から最も心配されていたことのひとつです。これまでに、出生時の障害や染色体異常、がん、生活習慣病などに関する大規模な調査が行われてきました。現在のところ、いずれの調査においても影響があるという結果は確認されていません。しかし、健康面での不安を訴える被爆二世・三世は多く、まだ解明されていない部分も残っているため、引き続き調査を見守っていく必要があります。

2-8-7. 被爆医療の取組み

身体的・精神的に疲弊した被爆者を救うため、被爆医療に従事してきた医師や研究者がいます。彼らは被爆者に寄り添いながら、放射線が人体に及ぼす影響を調査し続けました。そうした取組みによって、終わらない原爆後障害の実態が明らかになりつつあります。

2-8-8. 医学的調査の始まり

放射線の影響に関する調査は、原爆投下から間もない昭和 20（1945）年 10 月に開始されました。中心となったのは、長崎医科大学（現・長崎大学医学部）の調来助教授です。調教授は原爆で二人の息子を亡くし、自らも被爆して体調不良に苦しみましたが、医師として被爆者の治療を行うかたわら、生き残った医師や学生たちとともに約 5,800 人の症状を調査・記録しました。そして、被爆者の死亡率や死亡時期、外科的損傷、放射線病について論文にまとめています。これらは、人類が初めて経験した全身被爆に関する研究の出発点となりました。

グラフィック候補

- ・ 調教授の手記
- ・ 放射線による障害の図表

2-8-9. 被爆医師の証言

朝長万左男さん

（朝長先生の略歴や血液内科医としての研究や診療、平和運動への取り組みなどを紹介）

最も印象に残る言葉は、30 歳ぐらいで子どももできて、家庭もつくった揚げ句に、76 歳ぐらいになって発病した人が、「やっぱり原爆は自分の体の中に生き続けていたんですね」と言ったこと。ほんとに確信した人はそういうことを言いますね。それは 2 つのことを意味してるわけで、ひとつは、ほんとに医学的な意味で白血病の原因が（体の中に）巣くってた。もう一つは、何ていうかな、それだけ不安がずっと続いてたっていうことを告白してるわけですね。いつかは原爆の影響が出るんじゃないか、それが今回、白血病になって出てきたということだね。

長崎原爆の戦後史をのこす会編『原爆後の 75 年：長崎の記憶と記録をたどる』書肆九十九 2021 より

資料候補

- ・ 朝長先生の証言映像

2-8-10. 人体影響の生涯持続性

放射線の影響が生涯続く可能性を示唆したのが、骨髄異形成症候群（MDS）の出現です。MDS は正常な血液細胞が作られにくくなる病気で、白血病の前段階ともいわれます。これまで、白血病は被爆から 10 年以内に発症する場合が大半とされてきました。しかし、近年は高齢での発症が相次いでいるため、被爆により血液の元となる造血幹細胞が傷つき、長い期間にわたって白血病を誘発している可能性があると考えられています。

平成 16（2004）年、長崎の被爆者を対象とした MDS の研究体制が本格的に始動しました。長崎大学原爆後障害医療研究所と放射線影響研究所長崎研究所の合同調査では、爆心地から 1.5 キロメートル以内で被爆した人々の高い発症率が明らかになっています。

グラフィック候補

- ・ MDS の増加を示す図表

※資料やグラフィックは、今後の検討状況によって適宜更新する。

C コーナー「3. 二つの世界大戦」

3-1. 第一次世界大戦－平和に向けた国際秩序の形成

3-1-1. 世界戦争への道

19 世紀末以降、産業革命で経済成長をとげた欧米諸国や日本は、植民地の獲得を目指して互いに競い、アフリカやアジアなどを植民地化する帝国主義政策を進めました。各国は様々な努力で平和を保とうとしましたが、国民の間では外国に対する不信感や敵対心が高まりました。植民地でも独立を目指す動きが現れ、様々な対立が浮き彫りとなったヨーロッパは一触即発の状態となっ

ていきます。そして 1914 年 6 月、オーストリア皇位継承者の暗殺事件をきっかけに第一次世界大戦が始まりました。世界大戦には日本も権益拡大のため参戦。さらにアメリカと中国の参戦や植民地からの動員により戦場は世界各地へと広がり、史上初の世界戦争となりました。

資料・グラフィック候補

- ・ 帝国主義の風刺画
- ・ サラエボ事件の写真
- ・ ヨーロッパの平和運動に関する写真
- ・ 第一次世界大戦中の世界地図 など

トピック：第一次世界大戦と日本

明治維新後、欧米諸国と対等な国家を目指した日本は、日清・日露戦争を経て台湾や南樺太、朝鮮を植民地化し、満州（現・中国東北部）に権益を持つアジアで唯一の帝国主義国家となりました。日本にとって第一次世界大戦は権益拡大の好機であり、日英同盟を理由に参戦。ドイツが影響力を持つ南洋群島と山東半島を占領し、中国には日本の権益の確保と拡大を求めるなど海外進出を進めました。

資料・グラフィック候補

- ・ 第一次世界大戦に参戦した日本軍の写真
- ・ 第一次世界大戦に従軍した兵士の資料 など

3-1-2. 総力戦と新兵器の出現

第一次世界大戦は、総力戦と新兵器の出現により、戦争の被害が拡大する契機となりました。ヨーロッパの戦場では、大砲や機関銃などの弾丸から身を隠す塹壕戦となり、戦線が膠着。戦況の行き詰まりを打開すべく、戦車や飛行機といった新兵器が次々と開発・投入され、毒ガスのような大勢の人間を瞬時に殺傷する大量破壊兵器も登場しました。

また、戦争が長期化したことで軍隊だけでなく国民や物資の全てを戦争に動員する総力戦体制が築かれ、軍人以外の一般市民も戦争に協力することが求められました。総力戦により戦場の境界が消滅したことで攻撃対象は戦闘員から非戦闘員へと拡大。第一次世界大戦の死者は 2500 万人以上にのぼりました。

資料・グラフィック候補

- ・ 戦車や飛行機など新兵器に関する写真
- ・ 塹壕とガスマスクをした兵士の写真
- ・ 第一次世界大戦の映像
- ・ 戦争に動員された女性や植民地の人々の写真 など

3-1-3. 平和主義と国際協調体制の確立

第一次世界大戦の惨禍は平和への志向をもたらし、戦後は戦争のない世界に向けて新たな国際協調体制が確立しました。ヨーロッパの戦後秩序を定めたヴェルサイユ体制では、自国のことは自国で決める「民族自決の原則」により独立国が新たに誕生するほか、1920 年に国際協力と平和をつくるため国際連盟が創設されました。

またアジア太平洋地域では、アメリカやイギリス、日本の協調を目指すワシントン体制が確立し、これ以上の領土や植民地の拡大は行わないことで合意し、海軍の軍備を縮小する条約も結びました。そこでは日本も協調外交を展開し、戦後の国際協調と軍縮は順調に進みました。

資料・グラフィック候補

- ・ 国際連盟の写真（機能を踏まえて説明）
- ・ 常設国際司法裁判所や国際労働機関の写真（役割を踏まえて説明）
- ・ ワシントン会議の写真
- ・ ワシントン体制下で結ばれた条約の表（問題点も含めながら説明） など

トピック：反帝国主義の高まり

第一次世界大戦において植民地や従属地域は、将来の自治の拡大や独立と引き換えに戦争に協力したため、解放への期待を高めました。しかし、パリ講和会議で掲げられた「民族自決の原則」は、ヨーロッパのみに適用され、アジアやアフリカなどでは帝国の支配が続いたため、各地で独立をめざす民族運動が盛んになりました。朝鮮や中国でも日本の植民地支配や権益拡大に反対する運動が起こり、帝国主義に反発する声が大きくなっていました。

資料・グラフィック候補

- ・ 三・一独立運動や五・四運動の写真 など

3-1-4. 戦闘行為の規制と戦争の違法化

国際社会は、世界大戦以前から国際紛争の平和的解決だけでなく、戦時の非人道的な行為に歯止めをかけるため、軍事施設以外への攻撃や不必要な苦痛を与える兵器の使用を禁止していました。しかし、第一次世界大戦を防ぐことができず、空襲や毒ガスで多数の犠牲を出したため、国際連盟で 1923 年に無差別爆撃を違法とする「ハーグ空戦規則案」が作成され、25 年には生物兵器と化学兵器の使用を禁止する「ジュネーブ議定書」が採択されました。そして 28 年には国際紛争の平和的手段による解決を規定する「パリ不戦条約」が成立し、これまで合法とされてきた戦争が違法化されました。こうして戦後に高まった平和思想は、戦闘行為や戦争を規制する国際法として実を結びました。

資料・グラフィック候補

- ・ パリ不戦条約に関する写真

- ・ 戦闘行為や戦争を規制する国際法の表（世界大戦以前の取り決めも含む、問題点も含めながら説明）など

トピック：対立へと向かう日中関係

1926 年、中国では国家統一に向けて外国から奪われた権益の回収を目指す動きが現れました。国際連盟の常任理事国となった日本は不戦条約に参加するなど協調外交を展開しましたが、中国の日本権益が脅かされることへの危機感から 27 年より山東出兵を行いました。また、日本の関東軍は、満州を直接支配下に置くべく張作霖爆殺事件を 28 年に起こし、日中関係は対立へと向かいました。

資料・グラフィック候補

- ・ 山東出兵や張作霖爆殺事件に関する写真 など

3-2. 第二次世界大戦－戦争へ向かう日本と国際社会

3-2-1. 満州事変と国際連盟からの脱退

1930年代に入ると、日本やドイツなどでは世界恐慌による深刻な経済危機やヴェルサイユ・ワシントン体制に対する不満などから、領土の拡張と軍備の拡大を目指す勢力が台頭しました。日本では31年に関東軍が満州を日本の勢力下に置くべく南満州鉄道を爆破し、これを中国側の行為として自衛と称した軍事行動を満州各地に拡大、翌年「満州国」を建国しました。

この満州事変は国際紛争の平和的解決や中国の領土保全を定める国際法や国際条約に反するものであり、国際連盟は「満州国」の不承認を決議しましたが、日本はこれに反対し33年に国際連盟から脱退。ドイツやイタリアも後に続き、国際協調体制は崩壊に向かいました。

資料・グラフィック候補

- ・満州事変に関する写真
- ・国際連盟脱退に関する写真や新聞記事
- ・満州国に関する写真
- ・満州国に関するポスター など

トピック：ファシズムと軍部の台頭

1920年代にイタリアで生まれたファシズム体制は、世界恐慌ののちにドイツにも広まりました。そこでは、強力なリーダーシップを持つ独裁者が国籍や思想が異なる人を排除しながら改革を進め、国民の支持を獲得しました。一方、関東大震災や昭和恐慌で経済的に困窮した日本では、腐敗した政党を倒して軍中心の内閣を樹立し、国家を造り直そうとする動きが活発化し、二・二六事件以降、軍部の政治的発言力が増大していきました。

資料・グラフィック候補

- ・ムッソリーニとヒトラーの写真
- ・二・二六事件の写真 など

3-2-2. 日中戦争の拡大と長期化

満州事変は双方の話し合いにより一応の収束を迎えましたが、関東軍はさらなる勢力拡大を図ったため日中間の対立は激化。1937年7月、北京郊外で日中両軍が衝突した盧溝橋事件を契機に日中戦争が始まりました。日本軍は、中国の根強い抵抗にあいながら戦線を拡大し、12月に首都南京を占領。その過程で多数の民間人や捕虜を殺害する南京事件を引き起こしました。

日本軍が占領地を拡大する一方、中国の国民政府は重慶へと拠点を移し戦闘を継続。さらに国際社会の支持を獲得する努力を重ね、アメリカやイギリス、ソ連（現・ロシア）などの援助を受けながら、徹底抗戦を続けたため、日中戦争は泥沼化していきました。

資料・グラフィック候補

- ・ 日中戦争に関する写真
- ・ 国内の戦時体制に関する写真やポスター
- ・ 日中戦争期の資料 など

トピック：無差別爆撃の本格化

飛行機が戦争で活用されるようになった第一次世界大戦以降、欧州諸国は植民地の反乱を抑えるため空爆を頻繁に実施するようになりました。また、アジア太平洋地域では日本軍が中国の都市に対する爆撃を開始。1931年の錦州爆撃を皮切りに南京や重慶などで多数の市民が犠牲となり、ヨーロッパでもスペインの都市ゲルニカがドイツやイタリアの爆撃に晒されるなど、各地で市民を狙った無差別爆撃が本格化していきました。

資料・グラフィック候補

- ・ 重慶爆撃やゲルニカ爆撃の写真 など

3-2-3. 第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発

東アジアで日中戦争の戦火が続くなか、ヨーロッパでもドイツやイタリアが領土拡張を推し進め、1939 年ドイツがポーランドへ侵攻したことでイギリス・フランスが宣戦し、第二次世界大戦が始まります。翌年ドイツの優勢をみたイタリアが参戦し、両国はヨーロッパの大半を支配下に置きました。

一方、日本は、日中戦争の行き詰まりを打開するため、日独伊三国同盟を結び、東南アジアに進出しました。これに強く反発したアメリカは石油輸出の禁止などの経済制裁をとり、中国・仏印からの全面撤兵を要求しましたが、日米交渉は決裂。1941 年 12 月 8 日、日本軍がイギリス領マレー半島とハワイ真珠湾を攻撃したことで、アジア・太平洋戦争が開戦し、第二次世界大戦の戦火は全世界へ拡大しました。

資料・グラフィック候補

- ・ 第二次世界大戦に関する写真
- ・ 第二次世界大戦中の世界地図（ABCD 包囲網や連合国・枢軸国の状況が確認できるもの）
- ・ 真珠湾攻撃やマレー半島上陸に関する写真 など

3-2-4. 世界戦争の実相と展開

第二次世界大戦は、領土の拡大を目指す枢軸国と既存の支配地域を維持しようとする連合国の戦いとなりました。戦争は、第一次世界大戦を上回る総力戦となり、両陣営問わず国内や植民地、占領地の人と物が動員されました。そして、人々の士気を喪失させるため、無差別爆撃が大規模に実施され、多数の市民が犠牲となりました。

当初、枢軸国に優勢だった戦局は徐々に劣勢に傾き、日本も 1942 年のミッドウェー海戦の敗北以降、形勢が逆転。44 年には米軍の本土空襲が激化し、45 年 4 月になると沖縄で激しい地上戦が行われます。そしてドイツ降伏後の 7 月、連合国は無条件降伏を求めるポツダム宣言を発表しましたが、ソ連の和平斡旋に期待する日本はこれを受諾しませんでした。

資料・グラフィック候補

- ・ 第二次世界大戦で行われた空襲に関する写真
- ・ 第二次世界大戦に動員される人々の写真
- ・ アジア・太平洋戦争に関する写真と映像
- ・ 東京大空襲や沖縄戦の写真 など

トピック：「大東亜共栄圏」の実態

日本は、戦争の目的として欧米の植民地支配からのアジアの解放と「大東亜共栄圏」の建設を掲げました。しかし、実際は戦争遂行のためアジアの国々を支配下に置き、資源を獲得することにより、植民地や占領地では民族の歴史や文化を無視する皇民化政策を進めるだけでなく、戦力や労働力、物資確保のため大きな負担を課しました。こうした日本の支配に対し、各地では抵抗運動が起こりましたが、日本軍はこれを弾圧しました。

資料・グラフィック候補

- ・ 大東亜共栄圏に関する写真 など

3-3. 核時代の幕開けー原子爆弾の開発と投下

3-3-1. 原爆の開発と実用化

総力戦となった第二次世界大戦では、多くの国民が動員され、様々な兵器の開発・改良が行われました。アメリカでは、ウランの核分裂連鎖反応により膨大なエネルギーが放出されることがわかると、ドイツの原爆開発に対する懸念から 1939 年より原爆開発の可能性を探る研究に着手。1942 年からマンハッタン計画を発足させ、20 億ドルの経費と 60 万の人員を投じた原爆製造計画を始動させました。

そして 3 年後の 45 年 7 月 16 日、ニューメキシコ州アラモゴードで人類初の核実験「トリニティ」が行なわれ、ファットマンと同型のプルトニウム型原爆「ガジェット」が強烈な閃光を放ってさく裂。大量破壊兵器の頂点ともいえる核兵器は、関係者の期待以上の威力をもって完成しました。

資料・グラフィック候補

- ・ モード委員会報告書の写真
- ・ マンハッタン計画に関する写真
- ・ オッペンハイマーとグローヴズの写真
- ・ トリニティ実験とガジェットの写真や映像
- ・ トリニタイト など

3-3-2. 原爆の使用決定

アメリカとイギリスは 1944 年 9 月に原爆の対日使用の可能性について合意し、完成の見通しが立った 45 年 4 月から投下目標都市の検討を開始しました。そして 5 月に投下の事前警告は行わないことを決め、トルーマン大統領は 7 月 25 日に原爆投下命令を発しました。

アメリカには戦争終結の手段としてソ連への対日参戦の要請、原爆の使用を警告して天皇制存続を保証することで降伏を促すなどの選択肢がありました。しかし、ソ連の参戦前に原爆を投下することで、ソ連の影響力が戦後拡大することを阻止するとともに、莫大な経費を使ったマンハッタン計画の成果を示そうとしました。そのため、26 日に発表されたポツダム宣言では日本の降伏にあたり重要な言葉は明記されませんでした。

資料・グラフィック候補

- ・ ルーズベルト大統領とチャーチル首相の写真
- ・ 暫定委員会の議事録の写真
- ・ トルーマン大統領の写真
- ・ 原爆投下命令書の写真
- ・ ポツダム会談の写真 など

トピック：米軍による本土空襲の激化

第二次世界大戦では軍事目標だけでなく、都市や住民をねらった大規模な空襲が世界各地で行われました。米軍は 1944 年から B29 による日本本土への爆撃を開始し、北海道から沖縄までの全国約 100 都市を無差別爆撃の標的としました。そこでは、多数の市民が焼夷弾の犠牲となり、最終的に死傷者は 100 万に上りました。その中で市民を大量かつ無差別に殺傷する原爆が使用されることになります。

資料・グラフィック候補

- ・ 日本本土への主な空襲の表
- ・ 空襲や焼夷弾の写真 など

3-3-3. 原爆投下に反対する人々

アメリカの軍人や科学者の中には、一般市民を大量に殺傷する原爆の使用に反対する人々もいました。1945年5月、陸軍参謀総長のジョージ・マーシャルはスティムソン陸軍長官との会談で非戦闘員を大量に殺傷することに反対。ドイツ降伏後の1945年6月シカゴ大学の研究所にいたジェームズ・フランクら7名の科学者も、原爆の非人道性を指摘するとともに戦後の核拡散の可能性や核軍縮への悪影響まで予測し、無警告での原爆の使用に反対するフランク報告をスティムソンに提出しました。また7月、レオ・シラードら69名の科学者も無警告での原爆投下は道徳的に問題と反対する請願書を大統領に提出しましたが、それらの訴えが取り上げられることはありませんでした。

資料・グラフィック候補

- ・ ジョージ・マーシャルの写真
- ・ ジェームズ・フランクとフランクレポートの写真
- ・ シラードとアインシュタインの写真
- ・ シラードの請願書の写真 など

3-3-4. 広島・長崎への原爆投下

原爆投下の目標都市は、原爆の威力を正確に測るため、重要な軍事施設や軍需工場が存在するという理由だけでなく、一定以上の広さを持ち、空襲を受けていないことを条件に選ばれました。そして1945年8月2日、第一目標を広島、第二目標を小倉、第三目標を長崎とすることを決定し、8月6日に広島へ原爆が投下されました。その3日後の8月9日、小倉が視界不良だったため目標を変えたB29は、長崎に原爆を投下し、多くの市民が傷つき、命を落としました。

日本はソ連の対日参戦を契機にポツダム宣言の受諾に向かい、第二次世界大戦は5000万人以上の死者を出して終結しました。戦後、植民地は次々と独立へ向かいますが、「核の時代」が新たに幕を開け、世界は冷たい戦争へ突入していくことになります。

資料・グラフィック候補

- ・ 原爆投下の目標とされた都市の図
- ・ 模擬爆弾が投下された都市の図
- ・ ファットマンやリトルボーイの写真
- ・ 原爆投下後の長崎の写真 など

トピック：原爆投下をめぐる裁判

戦闘行為を規制した国際法は、軍事目標以外への攻撃や不必要な苦痛を与える兵器の使用を禁止しています。広島・長崎の被爆者が提訴した「原爆裁判」では、東京地方裁判所が1963年に「残虐な爆弾を投下した行為は不必要な苦痛を与えてはならないという戦争法の基本原則に違反している」との判決を下しています。また、96年に国際司法裁判所（ICJ）は「核兵器の威嚇と使用は一般的に国際法に違反する」との判断を示し、2021年の核兵器禁止条約の発効へとつながっていきました。

資料・グラフィック候補

- ・ 国際司法裁判所にて陳述する伊藤長崎市長の写真
- ・ ICJの判決文の写真 など

※資料やグラフィックは、今後の検討状況によって適宜更新する。

【備考（3. 二つの世界大戦）】

- ・各小項目の補足は関連資料の説明とトピックで行う。トピックは、原爆投下に至る歴史を理解するにあたり、より理解を深めることができるよう重要な項目を取り上げている。
- ・写真やモノなどの資料については、必要なものから候補として暫定的に入れているが、具体的な資料が決まっていないところもあるため、小項目の内容が固まり次第、検討していく。
- ・基本設計の「核兵器開発の歴史を大量破壊兵器開発の歴史に位置づけること」は中央の核兵器の模型のところで合わせて説明する。

C コーナー「4. 核兵器の脅威」

4-1. 東西冷戦と核兵器開発競争

4-1-1. 原子力の国際管理の失敗

昭和 20（1945）年 10 月 24 日、第二次世界大戦を防げなかった国際連盟の反省を踏まえ、国際連合が発足しました。翌年 1 月には原子力委員会が設置され、人類の破滅を阻止するために原子力の国際管理が検討されます。しかし、当時唯一の核保有国であったアメリカと、核兵器の開発段階にあったソ連（現・ロシア）との間で交渉がまとまらず、この構想は失敗に終わりました。核兵器廃絶に向けた機会を逃し、アメリカを中心とする資本主義陣営とソ連を中心とする社会主義陣営は、冷戦という世界規模の対立へと向かっていきます。

グラフィック候補

- ・ 冷戦の構造を示す地図

4-1-2. 原子爆弾から水素爆弾へ

原子力の国際管理構想が暗礁に乗り上げると、昭和 24（1949）年にソ連が原子爆弾（原爆）の実験に成功し、世界で二番目の核保有国となりました。核の独占体制が崩れたことで、アメリカは水素爆弾（水爆）の開発を急ぎ、昭和 27（1952）年に太平洋上で初めての水爆実験を行います。その威力は原爆より桁違いに大きく、長崎に投下されたファットマンの 450 倍以上に達しました。水爆は原爆を起爆装置とし、重水素や三重水素に核融合反応を起こさせる仕組みです。昭和 30（1955）年、ソ連もアメリカに対抗して水爆実験を成功させました。

資料候補

- ・ 水爆実験の写真
- ・ 世界終末時計に関する資料

4-1-3. 第五福竜丸事件と原水爆禁止運動

水爆実験は、新たに民間人の被ばく者を生み出しました。昭和 29（1954）年 3 月 1 日、マーシャル諸島のビキニ環礁でアメリカが水爆「ブラボー」の実験を行い、日本のマグロ漁船「第五福竜丸」の乗組員が被ばくしました。これをきっかけに、原水爆禁止運動が全国で広がります。翌年 8 月には第 1 回原水爆禁止世界大会が広島で開催され、海外の代表を含む 5,000 人以上が参加しました。大会では、原水爆の禁止を求める署名が日本で 3,238 万人分、世界で 6 億 7,000 万人分集まったと報告されています。核実験の禁止や核兵器の廃絶を求める声が、世界中で大きくなっていきました。

資料候補

- ・ 第五福竜丸事件に関する資料
- ・ 原水爆禁止世界大会の写真

4-1-4. 世界が最も核戦争に近づいた日

昭和 37（1962）年 10 月 16 日、ソ連がアメリカ本土に近いキューバに核ミサイルを配備しようとしたことで「キューバ危機」が起きました。アメリカはキューバを海上封鎖し、武力で阻止することも辞さない構えを示します。米ソ間の緊張は極度に高まり、核戦争勃発の危機に直面しました。最終的には同月 28 日にソ連が核ミサイルを撤去したことで回避されますが、この 13 日間は「世界が最も核戦争に近づいた日」となりました。これを教訓として、翌年には核実験を制限する初めての国際的な取り決めである部分的核実験禁止条約（PTBT）が、アメリカ・イギリス・ソ連との間で締結されました。

資料候補

- ・ キューバ危機の写真
- ・ 米ソによる核戦争の危機を風刺した作品

4-1-5. 核拡散防止への取組み

核戦争が現実味を帯びたことで、核兵器のない世界を目指す国際社会の取組みが進展します。昭和 45（1970）年、核不拡散、核軍縮、原子力の平和利用を目的とする核兵器不拡散条約（NPT）が発効されました。背景には、アメリカとソ連に加えてイギリス、フランス、中国も核兵器を保有するようになったため、これ以上の拡散を防ぐ必要がありました。条約では、この 5 か国を「核兵器国」として認めながらも、核軍縮への誠実な交渉を義務づけています。一方で、「非核兵器国」には、原子力の平和利用を認める代わりに核兵器の保有を禁止しました。NPT は現在、国連加盟国のほとんどが参加する普遍的な条約となっていますが、核兵器国と非核兵器国で異なる義務を負っているため、不平等条約という指摘もあります。また、平和利用を隠れ蓑にした核兵器の開発も問題となっています。

資料候補

- ・ 核兵器廃絶への取組みに関する写真や資料

4-2. 新たな核リスクの出現

4-2-1. 核軍縮の前進とアジア・中東での核拡散

平成元（1989）年12月、アメリカとソ連（現・ロシア）の両首脳が冷戦の終結を宣言すると、核兵器の削減が進められました。また、平成8（1996）年には、PTBTで制限されていなかった地下核実験も禁止する包括的核実験禁止条約（CTBT）が国連総会で採択されました。その一方で、非核兵器国による核開発が次々と公然化していきます。アジアでは、平成10（1998）年にインドが地下核実験を強行して核保有国になると、領土問題で対立しているパキスタンも対抗して核実験を行いました。北朝鮮は以前から核開発疑惑がありましたが、平成15（2003）年にNPTからの脱退を宣言し、3年後に核実験を強行しました。中東では、冷戦期からイスラエルの核保有疑惑がありましたが、否定も肯定もしない曖昧政策を取り続けています。

資料候補

- ・新興核保有国の核開発に関する資料

4-2-2. 核兵器関連物質と開発技術の流出

冷戦終結後の新たな核拡散に伴い、核兵器関連物質や開発技術の流出という問題が表面化しました。平成3（1991）年にソ連が崩壊すると、その混乱に乗じて流出したと思われる、解体後の核兵器から回収された核物質の密輸事件が相次ぎます。平成16（2004）年には、パキスタンの核開発を主導したA.Q.カーン博士の告白により、「核の闇市場」の存在が明るみに出ました。

グラフィック候補

- ・核の闇市場に関する図

4-2-3. 核テロの危険性

核物質が流出し、国家だけでなくテロリストなどの手にも渡ることが危惧されています。とくに、平成 13（2001）年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ事件以降、その懸念が増大しました。国際原子力機関（IAEA）では、想定される核テロとして、核兵器の盗取、盗取された核物質を用いた核爆発装置の製造、放射性物質の発散装置の製造、原子力施設や放射性物質の輸送等に対する妨害破壊行為を挙げています。

グラフィック候補

- ・ 想定される核テロリズムの図

4-3. 岐路に立つ国際社会

4-3-1. 核使用リスクの高まり

冷戦終結から 30 年が経過すると、世界は新たな大国間競争の時代を迎えました。中国の超大国化とそれに伴う急速な核軍拡もあり、アメリカ・中国・ロシアによる複雑かつ不安定な核抑止関係へと変容しています。加えて、宇宙空間やサイバー空間などの新領域や、人工知能（AI）をはじめとする新興技術の急速な発展が、核兵器システムのあり方にも影響を及ぼしています。これらは新たな核軍拡競争を招くだけでなく、情報の伝達ミスや偶発的な事故による核兵器使用のリスクを高める要因となります。

資料候補

- ・核兵器使用のシミュレーション

4-3-2. 弱体化する国際的枠組みと核のタブー

これまで核兵器を管理してきた国際的な枠組みが、深刻な状態に陥っています。NPT 再検討会議は 2 回連続で合意文書の採択に失敗し、CTBT も未だに発効する見通しはありません。また、令和元（2019）年、冷戦終結の象徴となっていた米口間の中距離核戦力全廃条約（INF 条約）が失効しました。令和 5（2023）年には、ロシアが米口間で唯一残された核軍縮の枠組みである新戦略兵器削減条約（新 START）の履行停止を表明しています。その前年、ロシアはウクライナへの軍事侵攻を開始しました。そして、「核の脅し」を繰り返し、核兵器は二度と使われてはいけないという「核のタブー」を揺さぶっています。

資料候補

- ・「核の脅し」を報じる新聞記事

4-3-3. 核兵器禁止条約の発効

平成 29（2017）年 7 月 7 日、国連加盟国の 6 割を超える 122 か国の賛成により核兵器禁止条約（TPNW）が採択され、令和 3（2021）年 1 月 22 日に発効しました。この条約は核兵器を「非人道兵器」と位置づけ、その開発と保有、使用あるいは使用の威嚇を含むあらゆる活動を例外なく禁止しています。前文では、国際条約として初めて「hibakusha（ヒバクシャ）」の言葉が使用され、広島・長崎の被爆者や世界の核実験の被害者が受けた苦しみと、核兵器廃絶に向けたこれまでの努力について言及されました。

資料候補

- ・ 核兵器禁止条約の採択時の写真

グラフィック候補

- ・ 核兵器禁止条約に署名している国の一覧

4-3-4. 日本被団協のノーベル平和賞受賞

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）は、昭和 31（1956）年に長崎で結成された被爆者による唯一の全国組織です。核兵器のない世界を実現するための努力と、核兵器が二度と使用されてはならないことを証言によって示してきたことが評価され、令和 6（2024）年 12 月にノーベル平和賞を受賞しました。ノーベル委員会は、被爆者が自らの壮絶な体験を語ることで確立した「核のタブー」が核兵器使用の圧力にさらされていると指摘し、今こそ被爆者の声に耳を傾ける必要があると訴えました。

資料候補

- ・ ノーベル平和賞の授賞式の写真

グラフィック候補

- ・ 世界の核兵器保有数の推移（主要な出来事や条約を記載）

※資料やグラフィックは、今後の検討状況によって適宜更新する。

5 解説パネル原稿（案）に対する小委員会及び運営審議会での主な意見

B コーナー「2. 原爆による被害の実相」

2-8. 放射線による被害

小項目	主な意見
2-8-2. 初期放射線と残留放射線	・ 外部被ばくと内部被ばくの違いは、グラフィックを用いて分かりやすく説明したほうがよい。
2-8-3. 被ばく線量と人体への影響	・ ガンマ線と中性子線を足したものが被ばく線量になることや、被爆した場所などの遮蔽状況を考慮した被ばく線量の推定がなされていることも説明してはどうか。
	・ 疫学調査では 100 ミリシーベルト以上から白血病や固形がんが増えてくるという知見もあるため、そのことを補足してはどうか。
	・ 日常生活で自然に放射線を浴びていることも紹介してはどうか。
2-8-4. 急性障害と後障害	・ 後障害が生涯持続性であるという説明を加えてはどうか。
	・ 「固形がん」が一般の人には伝わりにくいため、補足したほうがよい。
2-8-6. 遺伝的影響	・ 遺伝的影響の調査において、現在は DNA の解析が行われていることも加えてはどうか。
	・ 被爆二世への遺伝的影響について、「影響があるという結果は確認されていません」という表現は、「影響は否定できません」など、様々な資料を参考にしながら表現の検討を行ってほしい。
	・ 被爆二世への遺伝的影響について、疫学的な観点からいえば、「現在のところ」影響は確認されていないという点と、だからこそ「今後も」調査が必要という点が説明されていればよいだろう。
2-8-7. 被ばく医療の取組み	・ 被ばく医療について、「個々の被爆者に寄り添った医療」という点を強調してはどうか。
2-8-8. 医学的調査の始まり	・ 調教授と学生たちによる調査結果は重要であり、グラフィックで紹介してはどうか。
2-8-10. 人体影響の生涯持続性	・ 骨髄異形成症候群（MDS）だけでなく、固形がんも生涯持続性があることを説明してはどうか。
その他	・ 展示では、実際に起きた原爆の影響を淡々と示すのがよいだろう。

※上記の意見について、解説パネル原稿や展示資料のキャプション、グラフィック等での反映を検討する。

C コーナー 「3. 二つの世界大戦」

3-1. 第一次世界大戦 平和に向けた国際秩序の形成

3-2. 第二次世界大戦 戦争へ向かう日本と国際社会

3-3. 核時代の幕開け 原子爆弾の開発と投下

小項目	主な意見
3-1-1. 世界戦争への道	・「満州」は「満洲」と表記してはどうか。（歴史用語としても中国側の一般的表記を用いるため）
3-1-3. 平和主義と国際協調体制の確立	・「国際協力で平和をつくるため国際連盟が創設」の部分に、常設の国際機関として国際連盟が誕生したことを追記してはどうか。
3-2-2. 日中戦争の拡大と長期化	<p>・現状の「南京大虐殺」という用語が「南京事件」に変わっている。例えば「民間人や捕虜を虐殺する南京事件」や「民間人や捕虜を殺害する南京虐殺事件」というように、「虐殺」の文字を残す余地も残っていると思うが、歴史学者はどのように扱われるのか。また、この資料館には中国の方もたくさん来られるが、中国でも「南京事件」という捉え方で書いた学術書や歴史書はあるのか。</p> <p>→「南京事件」の表記は、教科書などで幅広く共有されている中立的な歴史用語としてバランスの取れた表現ではないか。中国の学術書や歴史書は把握していないが、「南京事件」の「殺害」と「虐殺」の表現については、捕虜や民間人を殺害することが不法行為であることは説明文から読み取ることが可能なため、感情的な反応を示す「虐殺」という言葉を使うよりも、中立的な表現である「殺害」で中身を理解してもらうのがよいだろう。</p>
	<p>・南京事件は起きていないので展示しないでほしい。展示するなら証拠を示してほしい。</p> <p>→南京事件の存在を証明する史料は存在する。南京事件の記述を無くせば、南京事件は隠すのに原爆の被害は訴えるのかと攻撃を受ける場合がある。あったことはあったと書くべき。</p>
	<p>・南京事件と原爆投下の関連性をどのように捉えたらいいのか。日本の加害を展示することで原爆投下容認論につながらないか。</p> <p>→太平洋戦争が始まったのは、日中戦争を終わらせるためアジアから米英を追い出そうとしたことに原因がある。原爆の被害だけを訴える展示では世界に対して説明がつかない。日中戦争がどのような戦争でどういったことが起きたのか説明することは必要。</p>

小項目	主な意見
3-3-1. 原爆の開発と実用化	・シラードとアインシュタインの働きかけによって、原爆の開発が始まったことを紹介してはどうか。
3-3-2. 原爆の使用決定	・「ポツダム宣言では日本の降伏にあたり重要な言葉は明記されませんでした」の「重要な言葉（原爆の使用の警告や天皇制存続の保証）」を具体的に書いたほうがよい。4行目「アメリカには戦争終結の手段として～」と7行目「そのため、26日に発表された～」の文章は関連性があるのに離れていてわかりにくいため、これらの文章をつなげて、その後にソ連の影響力阻止などの話を加えてはどうか。
その他	・アジアの人には被害だけ訴えても伝わらない。日本の植民地支配や南京虐殺などを説明してこそ、核兵器廃絶に向けて共に歩みだすことができる。
	・展示の説明文では「侵略」という言葉がないが、日本の加害と侵略をしっかりと発信することが大事ではないか。

※上記の意見について、解説パネル原稿や展示資料のキャプション、グラフィック等での反映を検討する。

C コーナー「4. 核兵器の脅威」

4-1. 東西冷戦と核兵器開発競争

4-2. 新たな核リスクの出現

4-3. 岐路に立つ国際社会

小項目	主な意見
4-2-1. 核軍縮の前進とアジア・中東での核拡散	・ 中東の核拡散では、イラクやイランの事例も取り上げてはどうか。
4-2-3. 核テロの危険性	・ 核兵器に転用し得る核物質の説明を加えてはどうか。
4-3-1. 核使用リスクの高まり	・ 「核抑止政策」は重要な反面、理解しにくい部分でもあるので、詳細な説明を加えてはどうか。
	・ なぜリスクのある核兵器を保有しているのか、その理由も説明したほうがよい。
4-3-2. 弱体化する国際的枠組みと核のタブー	・ 特定の国だけの問題ではなく、世界が軍拡に向かっているという現状を説明してはどうか。
	・ 「核抑止」の是非については、来館者に委ねて考えてもらうという方法もあるのではないかな。
4-3-3. 核兵器禁止条約の発効	・ 核兵器廃絶に向けた歩みが止まっていないことを示すためにも、前項目との文脈上のつながりを考慮してはどうか。
4-3-4. 日本被弾協のノーベル平和賞受賞	・ 被爆者の努力とともに、世界も動いてきたことが可視化できるようにしてはどうか。
その他	・ 全体をとおして、展示内容が網羅的過ぎるのではないかな。
	・ 「もし核兵器が使われたらどうなるのか」という疑問に答えられるものが用意できるとよいのではないかな。
	・ 「非核兵器地帯条約」についても紹介してはどうか。
	・ 年号表記について、元号より西暦を先にしたほうが分かりやすいのではないかな。

※上記の意見について、解説パネル原稿や展示資料のキャプション、グラフィック等での反映を検討する。

その他、展示全体に対する意見

- | |
|---|
| ・「日本の加害に対する痛切な反省と心からのお詫びを入れて共に核兵器廃絶のため行動しよう」という「長崎原爆資料館宣言」を展示してはどうか。 |
| ・二度と同じようなことを起こさないために戦争の歴史を学ぶという目的意識を来館者に持ってもらうことが大切。それぞれのコーナーでどのような目的意識を持って展示を見てもらいたいのか、メッセージをわかりやすく提示したらどうか。 |